

# 宇治市埋蔵文化財発掘調査概報

## 第41集

◀ 白川金色院跡・平等院旧境内遺跡・大鳳寺跡 ▶



1998

宇治市教育委員会







経塚遺構全景

## 序

宇治市教育委員会では、文化庁から国宝重要文化財保存整備費補助金を、京都府から文化財緊急保存費補助金の交付を受け、市内に所在する重要な遺跡や緊急に調査・保護を必要とする遺跡について、昭和62年度より計画的に発掘調査を実施しています。今年度は継続調査である白川金色院跡と開発に伴う平等院旧境内遺跡・大鳳寺跡の計3件の調査を実施しました。

今年度の白川金色院跡の発掘調査では、平安時代末期の経塚遺構と室町時代中期の闕伽井跡を主に検出しました。経塚遺構では経筒本体こそ見つからなかったものの、豪華な副納品が数多く出土し平安時代のきらびやかな貴族文化を彷彿とさせるものとして大変注目をあびました。

平等院旧境内遺跡では、平安時代後期の庭園跡を検出しました。文献によれば当地一帯には南泉房と呼ばれた房があり、宇治大納言と呼ばれた源隆国がそこで『宇治拾遺物語』の原典となる『宇治大納言物語』を執筆したといえます。今回見つかった庭園はその南泉房のものと思われ、歴史解明だけではなく古典文学の世界を紐解く上でも興味深い資料となりました。

大鳳寺跡は、7世紀後半に創建された古代寺院です。今回の調査では、明確な遺構こそ明らかにできなかったものの、出土した瓦から往時の壮大な寺院の姿を垣間見ることができました。

本書はこの3件の発掘調査成果を一冊にまとめたものです。本書が多くの方々目に触れ、広く宇治の歴史を知る上での一助になれば幸いです。

最後になりましたが、調査にご理解とご協力をいただいた土地所有者の方々を始め、調査にあたり、ご指導ならびにご助力を賜りました関係各位に対して心よりお礼を申し上げます。

平成10年3月

宇治市教育委員会

教育長 谷口道夫



## 例 言

1. 本書は、平成9年度宇治市内遺跡発掘調査事業の成果概要である。

2. 本書が収録する遺跡は下記の3遺跡である。

遺 跡 名	種 類	主 な 時 代	所 在 地	調 査 期 間
白川金色院跡	寺跡	平安時代	白川娑婆山・宮の前・宮の後	9年11月～10年3月
平等院旧境内遺跡	寺跡	平安時代	宇治塔川	9年8月～9年11月
大鳳寺跡	寺跡	白鳳時代	菟道西中・藪里	9年7月

3. 本書は宇治市教育委員会が刊行する『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』の第41集にあたる。

4. 本事業の経費は9,000,000円で、文化庁から国宝重要文化財等保存整備費補助金としてその1/2を、京都府から文化財緊急保存費補助金としてその1/4の交付を受けた。

5. 本発掘調査事業に関する期間・体制は下記のとおりである。

発掘主体者	宇治市教育委員会		
発掘責任者	宇治市教育委員会	教育長	岩本昭造（～9. 10. 12.） 谷口道夫（9. 10. 13.～）
発掘担当者	同	社会教育課 文化財保護係 主事	荒川史 浜中邦弘
発掘事務局	宇治市教育委員会	参事	岡本茂樹
	同	社会教育課長	小西吉治（～9. 10. 15.）
	同	社会教育課 文化財保護係長	吉水利明
	同	社会教育課 主任	日原洋子
調査指導	京都府教育庁文化財保護課 （財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 京都府立山城郷土資料館		
調査参加者	中井淳史、松村英之、中村幸代、久保千恵子、宮崎一弥、小林俊之、河村亜由美、荒木浩一、山中聡、志村みどり、和田妙子、黒石昌代		

6. 本発掘調査の実施期間中に下記の方々から専門的な御指導・御教示、ならびに御協力をいただいた。（順不同・敬称略）

岩井勘造、小島喜三、古川悦子、白川区、久保見勇、田中哲雄・小池伸彦・本中眞・岸本直文（文化庁）、中谷雅治・三宅睦子・磯野浩光・山口博（京都府教育委員会）、杉原和雄（京都府立山城郷土資料館）、金子裕之・加藤允彦・杉山洋（奈良国立文化財研究所）、今井教（東京国立博物館）、伊東史朗・久保智康・宮川禎一（京都国立博物館）、牛川喜幸・鈴木嘉吉・小野山節・川上貢（平等院庭園整備委員会）、上原真人・西山良平・村木二郎（京都大学）、亀井明德（専修大学）、藤谷壽（同志社女子大学）、増渕徹（京都橘女子大学）、太平聡（宮城学院女子大学）、大三輪龍彦・河野眞知郎（鶴見大学）、高橋美久二（滋賀県立大学）、福田誠・小林康幸（鎌倉市教育委員会）、出川哲朗・野村恵子（大阪市立東洋陶磁美術館）、斉木秀雄・原廣志・菊川泉・神山晶子（鎌倉考古学研究所）、高橋與右衛門

(財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター)、八重樫忠郎(平泉町教育委員会)、飯村均(財団法人福島県文化センター)、足立佳代(足利市教育委員会)、堀内明博(古代学研究所)、橋本久和(高槻市立埋蔵文化財調査センター)、鋤柄俊夫(財団法人大阪府文化財調査研究センター)、波部健(宇治田原町教育委員会)、森幸三(加西市教育委員会)、川畑聰(高松市歴史資料館)、平等院、宇治市歴史資料館

7. 本書の編集は、宇治市教育委員会社会教育課文化財保護係が行い、実務を浜中邦弘が担当した。本書の執筆分担は下記のとおりである。

白川金色院跡

I・II・III・V ..... 浜中邦弘  
IV ..... 中井淳史

平等院旧境内遺跡

I・II・III・V ..... 浜中邦弘  
IV ..... 松村英之

大鳳寺跡 ..... 荒川史



収録遺跡 (1:25,000)



# 本文目次

## A. 白川金色院跡発掘調査概報

I はじめに .....	1
II 調査の経過 .....	2
III 検出遺構 .....	5
IV 出土遺物 .....	16
V まとめ .....	19

## B. 平等院旧境内遺跡発掘調査概報

I はじめに .....	21
II 調査の経過 .....	22
III 検出遺構 .....	25
IV 出土遺物 .....	32
V まとめ .....	35

## C. 大鳳寺跡発掘調査概報

I はじめに .....	37
II 調査の概要 .....	37
III まとめ .....	39

抄 録 .....	40
-----------	----

## A. 白川金色院跡発掘調査概報



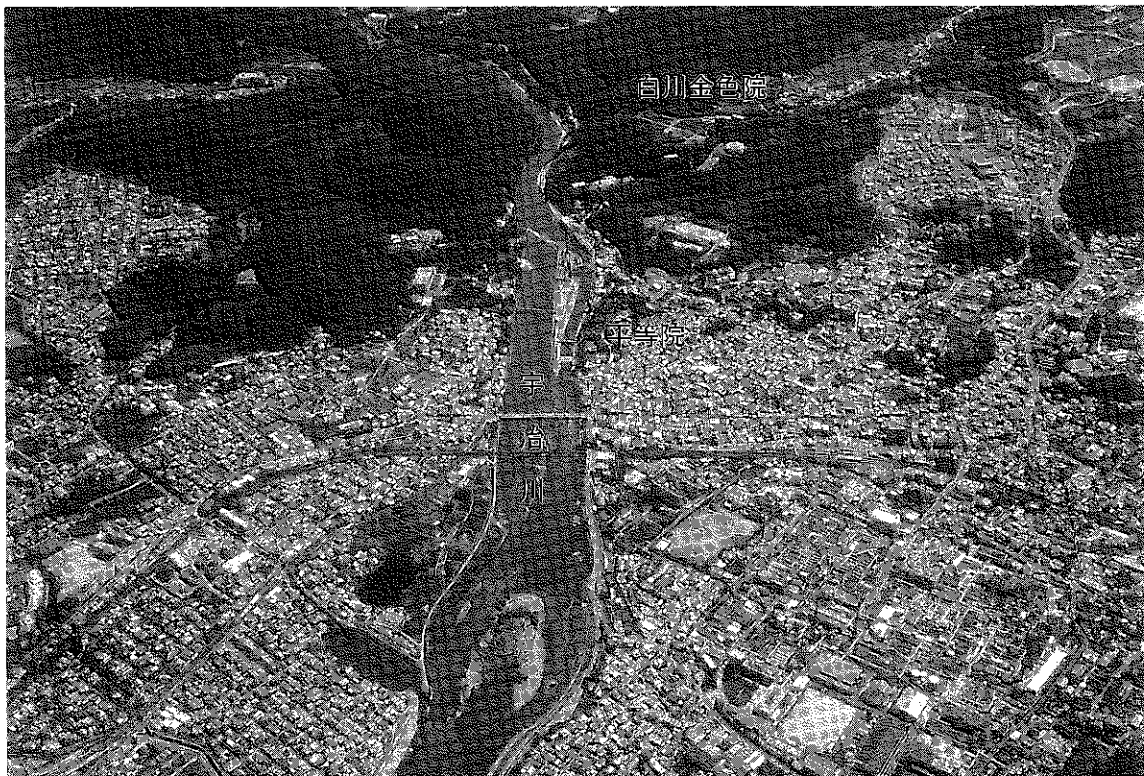


## I はじめに

白川金色院は、平安時代後期の康和4（1102）年に関白藤原頼通の娘にあたる四条宮寛子（後冷泉皇后）によって創建されたと伝えられる寺で、白川宮の前・宮の後・娑婆山一帯に寺跡が展開する。金色院の想定寺域は、南北400m、東西200mと広大な範囲を示し、現在はその大半が水田・茶畑に帰している。

史料によれば、室町時代には数多くの坊を有する中世的寺院として発展をむかえるが、江戸時代前期にはすでに衰退の兆しが始まり、幕末まで残っていた文殊堂や福泉坊も明治の廃仏毀釈によって破却、廃寺となったようである。現在、寺跡には金色院鎮守の白山神社や惣門、寛子の供養塔と称される九重石塔等の数多くの遺産が残されており、寺跡を含めて今もなお往時の面影を良く残している。

今回の調査は、土地所有者である古川悦子氏、白山神社総代である小島喜三氏の御協力を得て、白川娑婆山16-14番地、宮の前3-1・3-3番地、宮の後5番地において発掘調査を実施することとした。今回の調査では、娑婆山16-14番地で平安末期の経塚遺構と室町中期の關伽井跡、宮の後5番地で近世福泉坊の遺構が良好な状態で確認できたため、当該地を重点的に調査した。



第1図 宇治川谷口部上空写真（西から）

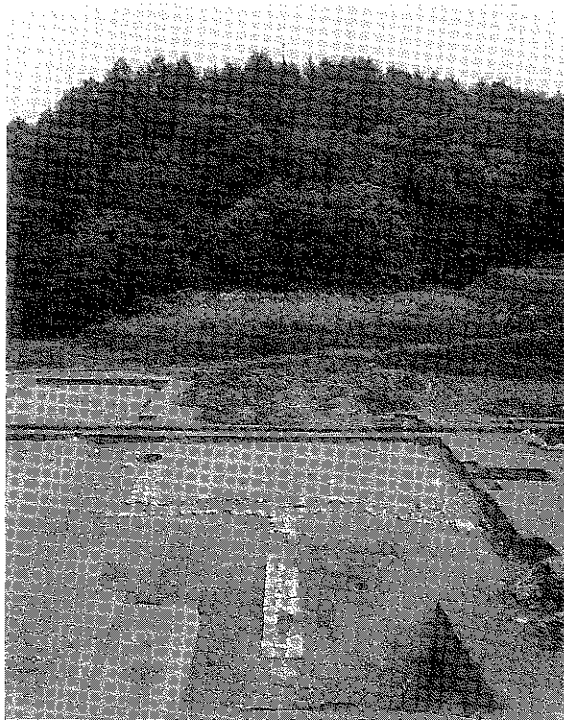


## Ⅱ 調査の経過

### A. 過去の調査

白川金色院の調査は、平成5年度より範囲及び内容確認を目的とする5ヶ年計画の調査が開始された。本年度はその5ヶ年目にあたる。これまでの発掘調査によって従来伝承の域を越えることのでなかった白川金色院は、かなり具体的な形でその歴史的な姿をよみがえらせることができた。と同時に総体として遺跡そのものの状態が極めて良好であることが判明し、周辺の景観も変化することがなく、白川金色院の所在する盆地全体がその当時の風景を残すままに第一級の寺跡であることが明らかとなってきたのである。

まず最初にこれまでの調査成果をごく簡略に述べていく。白川金色院が継続調査に入る前、一度調査が行われている。白川区集会所建設に伴っての調査で、江戸時代の古絵図に記載される弁天池・弁天島の跡を検出、池の埋土から11世紀後半に比定される土師皿が出土したことから平安期の金色院の実態が朧気ながら見えたのであるが、緊急調査であるためその後の進展はなく、再び忘れられることとなった。平成5年度に継続調査が開始、初年度では平安後期河内系の平等院と同範の軒瓦が出土したことから、平等院との接点を初めて見出させた画期的な発見となった。平成6年度調査では、金色院の中心域より離れた南側の棚田上で室町中期の金色院再興時に造営された坊跡が確認された。坊を構成する建物・庭園の実態が



第2図 発掘された中世坊跡（平成6年度調査）

良く理解でき、特に坊の主屋にあたる建物が、中世では絵巻物や文献資料でしか見ることのできない『主殿造』と呼ぶ建築様式で造られており、今回の検出は初の実例として注目をあびた。平成7年度の調査では待望の平安期の礎石建物が見つかり、次年度の詳細調査で12世紀初頭に創建された一間四面堂であることが明らかとなった。この年代観は寛子創建説が示すそのものであり、この発見により白川金色院は寛子が創建した蓋然性が極めて高くなり、歴史の舞台に躍り出ることとなった。これらを踏まえた上で今年度の調査を開始した。

## B. 今年度の調査

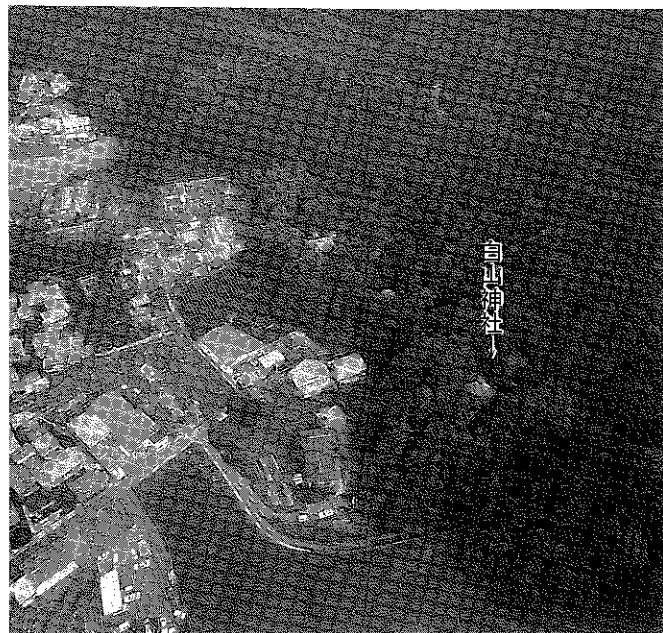
今年度の調査地は、宮の後5番地、宮の前3-1・3-3番地、娑婆山16-14番地である。調査地が分散しているため、調査区を設定し、順に第1～4調査区とした。

第4調査区は重機掘削が行えないため、人力による調査で開始した。第1～3調査区は重機による表土排除作業を行った。後者は遺構面及び遺構の有無の確認をまず行い、重機掘削段階で一時中止し、前者地区に調査主力をおき、進めた。調査中盤で白山神社背後の山頂付近で経筒外容器片が採取され、急遽調査区を設定し、第5調査区として第4調査区と同時併行で調査を進めた。第5調査区では経塚遺構、第4調査区では閼伽井跡が非常に良好な状態であられた。第5調査区は各遺構それぞれは小規模ながらも重要な遺物が続々と検出されたために、盗掘等を考慮して調査を迅速に進めた。遺構の掘削、遺物の出土状況の図面、写真撮影等の記録作成を即座に行った。第4調査区は閼伽井の本体である井戸を中心にして掘削し、遺構の状況を鑑みながらそれに応じてトレンチを拡張していった。閼伽井に付随する滝石組や石畳通路、池等の諸施設が良好に残っていたことから、可能な限りでトレンチの範囲を広げた。

発掘調査終盤において先に全容が明らかとなった経塚遺構の報道発表を行い、その成果を一般市民に公表するべく2月6日に現地説明会を実施した。その後、調査途中となっていた閼伽井跡と福泉坊跡の調査を進め、完掘段階でトレンチの位置図・平面図・土層断面図を作成、写真撮影を実施して記録を作成した。閼伽井跡は明らかになった範囲で報道発表を行った。

埋め戻しに関しては、経塚遺構と福泉坊跡では遺構保護のため、遺構部分に限定して、茶畑の寒冷紗を敷き、掘削とは逆の工程で土砂の埋め戻し作業を行った。閼伽井跡については、遺構全体に寒冷紗を敷いて遺構の保護を行い、その上に掘削土砂を薄くかけた。他のトレンチはそのまま重機で埋め戻しを行った。

すべての作業を終え、復旧したのは3月5日であり、同日をもって発掘調査を終了した。発掘調査面積は結果的に合計350㎡となった。



第3図 調査地上空写真(南から)





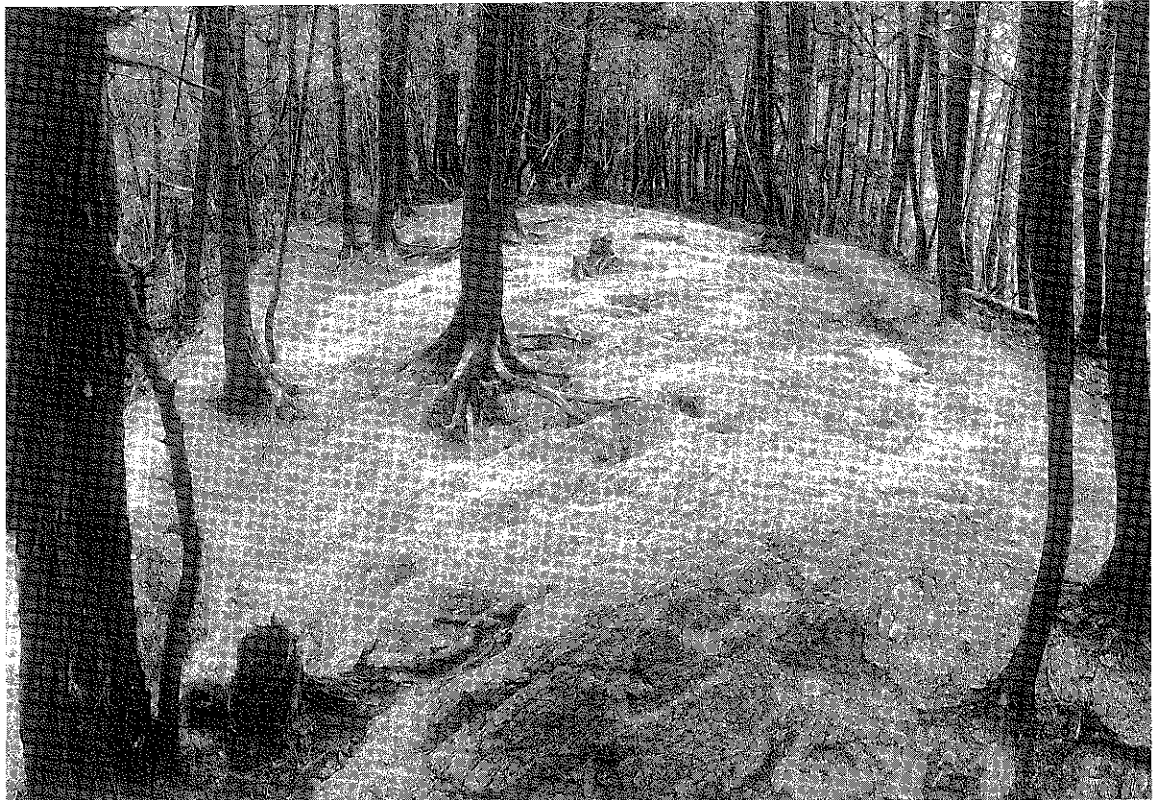
### Ⅲ 検 出 遺 構

今回の発掘調査は、第1～5調査区に分け実施した。第5調査区で平安時代末期の経塚遺構、第4調査区で室町時代中期の閼伽井跡、第1調査区で近世福泉坊跡がいずれも良好な状態で確認できた。幕末作成の『白山宮の図』によって辻坊跡が想定される第2調査区でも礎石や石列等の建物に関連する遺構が確認されたが、湧水が著しいために今回は調査を断念せざるをえなかった。第3調査区は、白川区集会所を中心として広がる園池の導水路が想定された地点であるが、調査の結果、現地表面下約2mで南から北へ下がる旧傾斜面を確認したにとどまった。ただしこの調査成果から、導水路は調査区北側の道路下に位置することがほぼ確定的となった。現在のところ、各トレンチで見つかった遺構の詳細は、遺物同様、整理途中である。このため、ここでは検出した経塚遺構、閼伽井跡、福泉坊跡の概略について述べていくこととする。

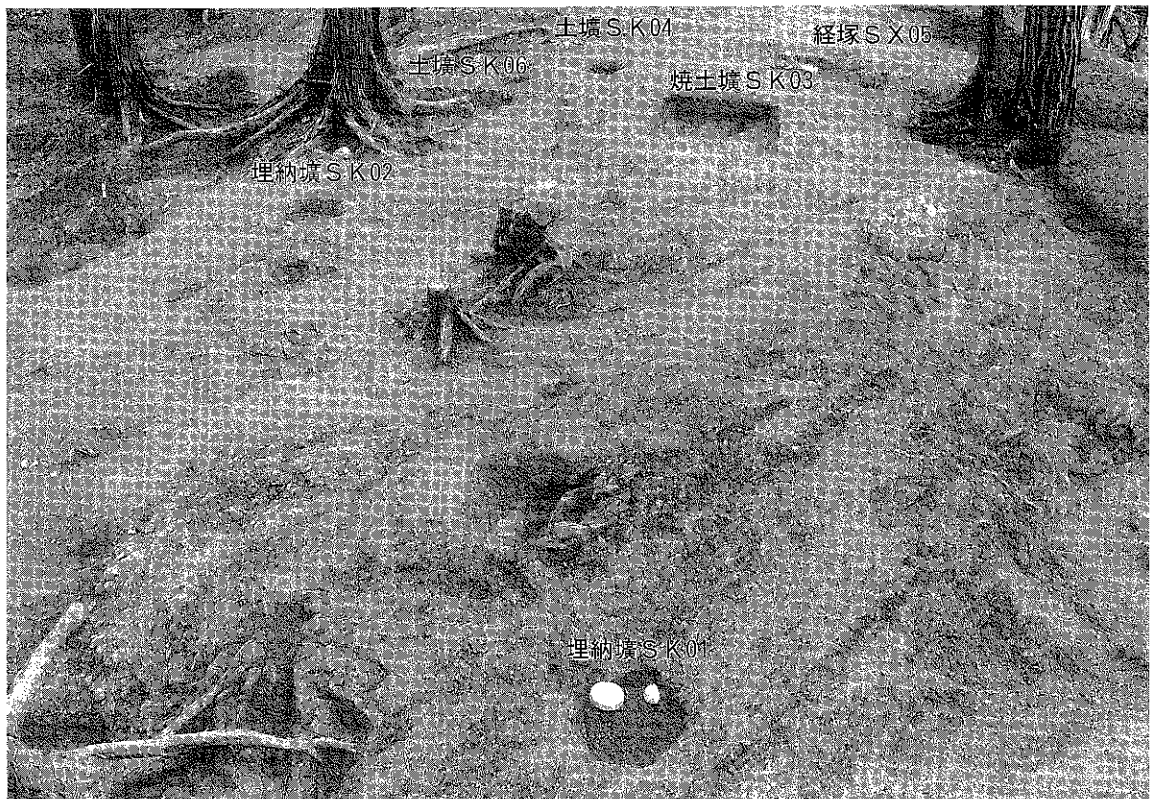
#### A. 第5調査区（第5～13図）

この調査区で検出されたのは平安時代末期の経塚遺構である。立地は白山神社背後の山頂付近で、山頂より白山神社側の尾根筋にわずかに下った所に展開する。標高は概ね103mから105mの間に位置する。山頂の標高は107m程である。山頂付近であるため、表土層は薄く、10cm程掘り下げると地山層である岩盤面があらわれた。検出された経塚関連遺構はその岩盤をくりぬいて形成されていた。岩盤はもろく、比較的加工しやすい。ただし、この脆弱ゆえに、調査では土壌を穿った際の加工の状況は見出だすことができなかった。検出した経塚関連の遺構は計7か所であり、その他遺構との帰属性が不明な遺物が4地点で見つかった。遺構の概要は発掘経緯順、すなわち上層から下層に至る遺物の出土状況を中心に説明し、必要に応じて簡単な補足説明を行っていくこととする。

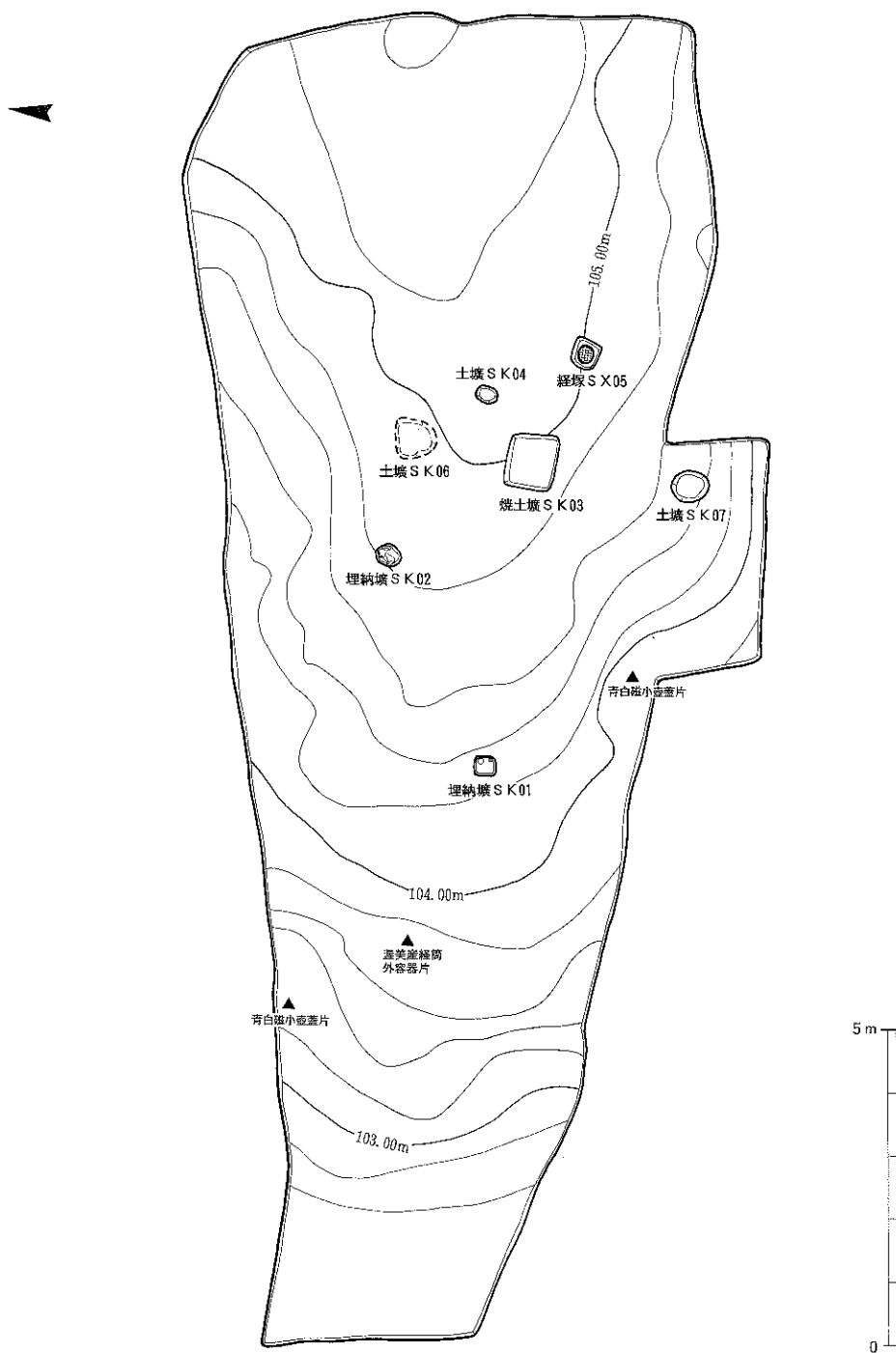
**埋納壙 S K 01（第7～10図）** 直径0.8m程の方形の小さな土壌である。表土を除去するとベース面である岩盤中に直径約15cm、厚さ7cm程の偏平な石が2個並置した状況で検出された。これらは山頂付近ではみかけない石材であり、人為的に持ち運んできたものと理解された。石を取り外すと、土壌内東側で南北に並置する青白磁の合子（北側）と小壺（南側）がほぼ同一レベル面上で出土した。いずれもほぼ完存状態であった。小壺は横向きに倒れていたが、元来は身と蓋が合わさり配置されていたと思われる。合子は、身と蓋が合わさって出土した。土壌内西側では、鉄釘が出土した。この鉄釘は土壌内西側でしか出土せず、その後は土壌底部付近まで出土した。鉄釘から木箱の存在が想定されるが、出土位置からみて輸入陶磁器や後述する一括遺物群とは異なるものとして理解された。陶磁器を取り上げ全体的



第5図 第5調査区経塚遺構と周囲の現風景（西から）



第6図 第5調査区経塚遺構の出土状況（西から）



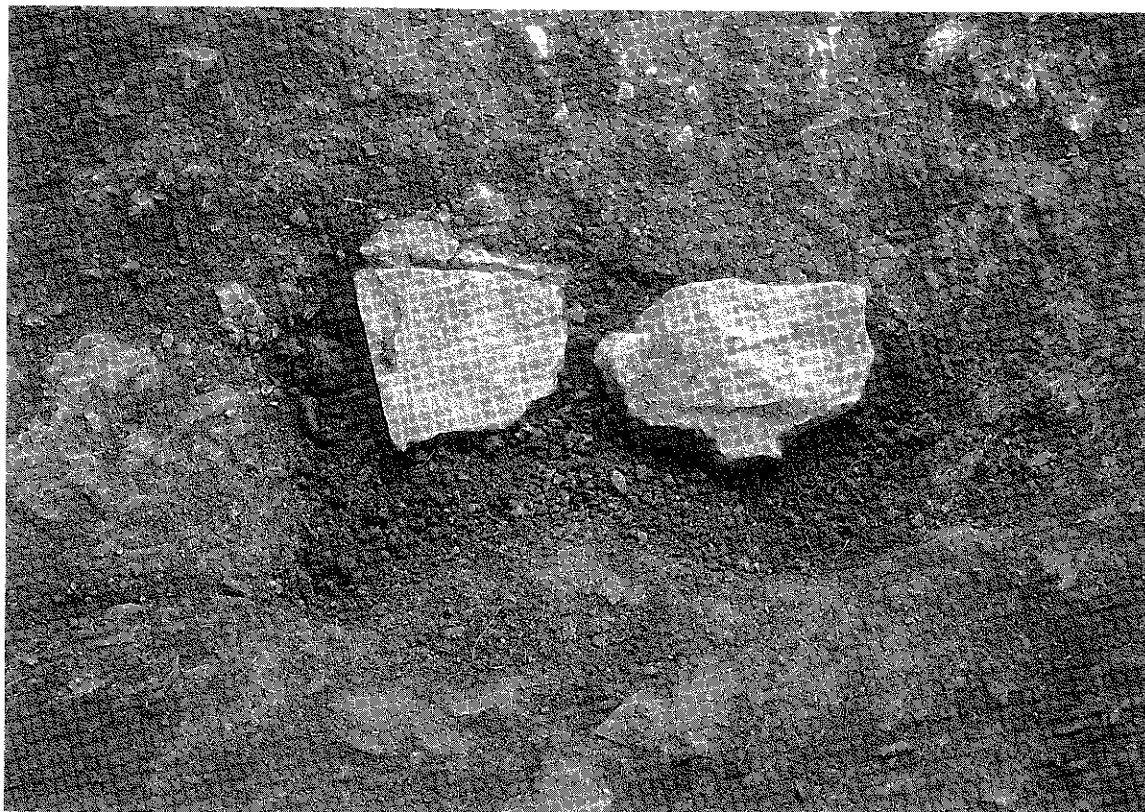
第7図 第5調査区トレンチ（経塚遺構）平面図

に掘り下げると、陶磁器のほぼ真下に土壌内に落ち込むように鏡が2枚重ねで、鏡背を上に向けた状態で出土した。さらに鏡の上面からは鉄製毛抜き1本、現状をとどめない青銅製品と漆製品、木製の数珠31顆、皇宋通寶1枚が出土した。これらは一括でおそらく箱状のものに入っていたものと想定される。また、これらの遺物群から少し離れた地点で青銅製瓔珞が2点出土した。瓔珞については、出土状況から概ね前述遺物と一括のものとしてとらえられよう。これらの一括遺物をおさめた箱は出土状況から土壌上部の東側に置かれていたことは

間違いない。土壌内の空間利用からみれば、これらはこの土壌の主体とはなりえず、副納品の位置付けになろう。土壌内からはその後、鉄釘が出土するものの、その他は土壌底部からガラス小玉1点が出土しただけである。土壌の深さは現状で18cm程と浅かった。以上のことからみると、土壌内の主体は鉄釘で打ち付けられた木箱であり、その中に納められたものの残存がガラス小玉となろうか。遺構と遺物の出土状況の整理及びその詳細な検討はまだできていないため、以上の説明は推測部分が多い。詳細な検討をもって後日別稿で述べたい。

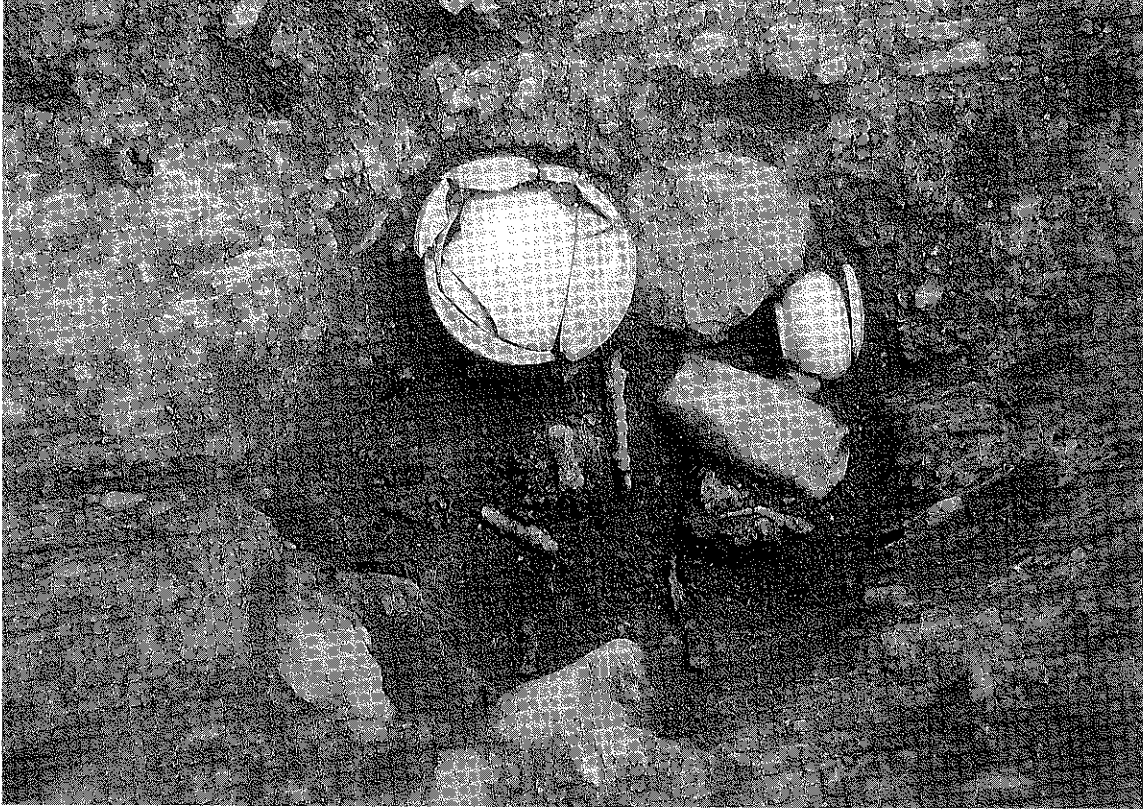
**埋納墳S K02 (第7・11図)** 埋納墳S K01と同様、岩盤を露出させると蓋石が2個並置して検出された。蓋石は、土壌内に落ち込むようにして出土した。検出面からわずかに埋土を除去すると北側壁面に合子の身と蓋が別々で土壌内に落ち込むようにして出土した。出土状況から、埋納時点では身と蓋が合わさり、蓋石の横付近に置かれていたと想定される。土壌陥没時に蓋石とともに土壌内に落ち込んだのであろう。土壌内からはその他では底部近くでガラス製小玉9点がまとまって出土した。

**焼土壌S K03 (第7・12図)** 一辺約0.8~0.9mの方形の土壌である。深さは0.2m程である。壁面は火によって0.3cm程の厚さで赤変色している。底部は赤変色している部位もあるが、壁面ほど顕著ではない。遺物は遺構の輪郭検出面上で埋土内につき刺さって瓦器皿が1点出土した以外は、認められなかった。埋土は炭と灰を多量に含む。現状では護摩焼き跡を

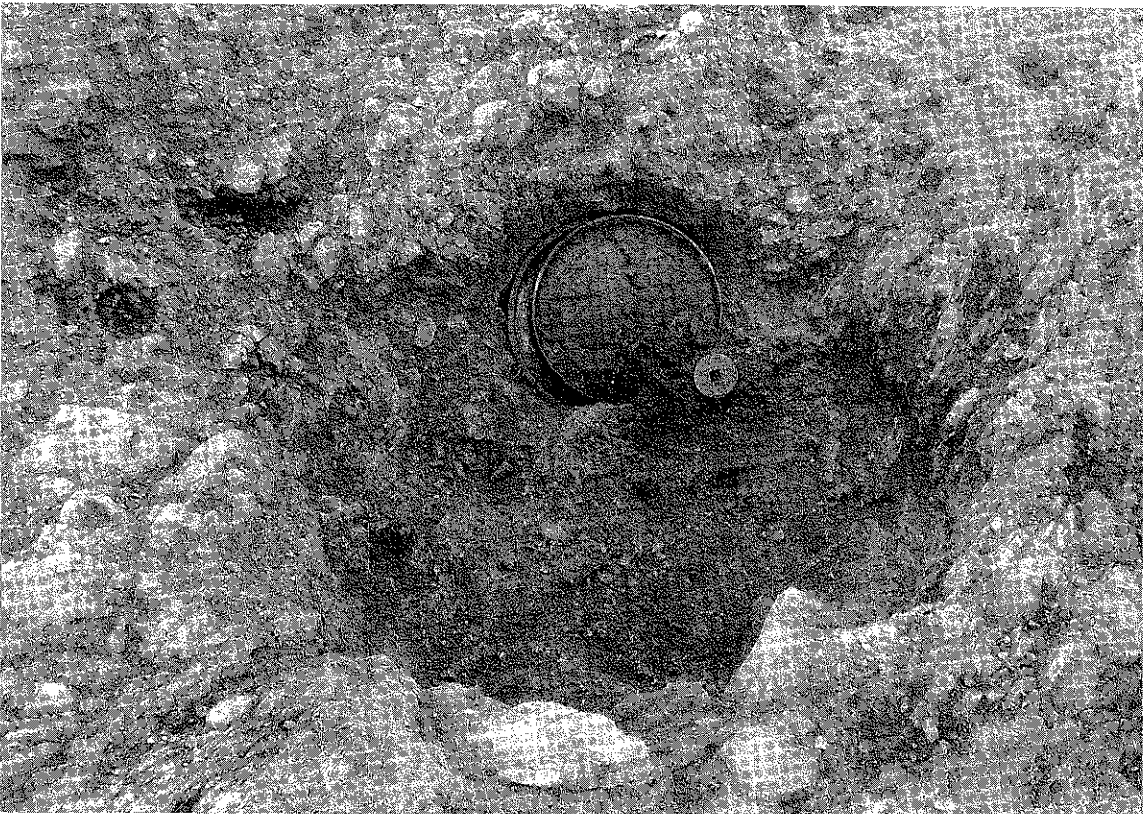


第8図 埋納墳S X01蓋石検出状況 (西から)

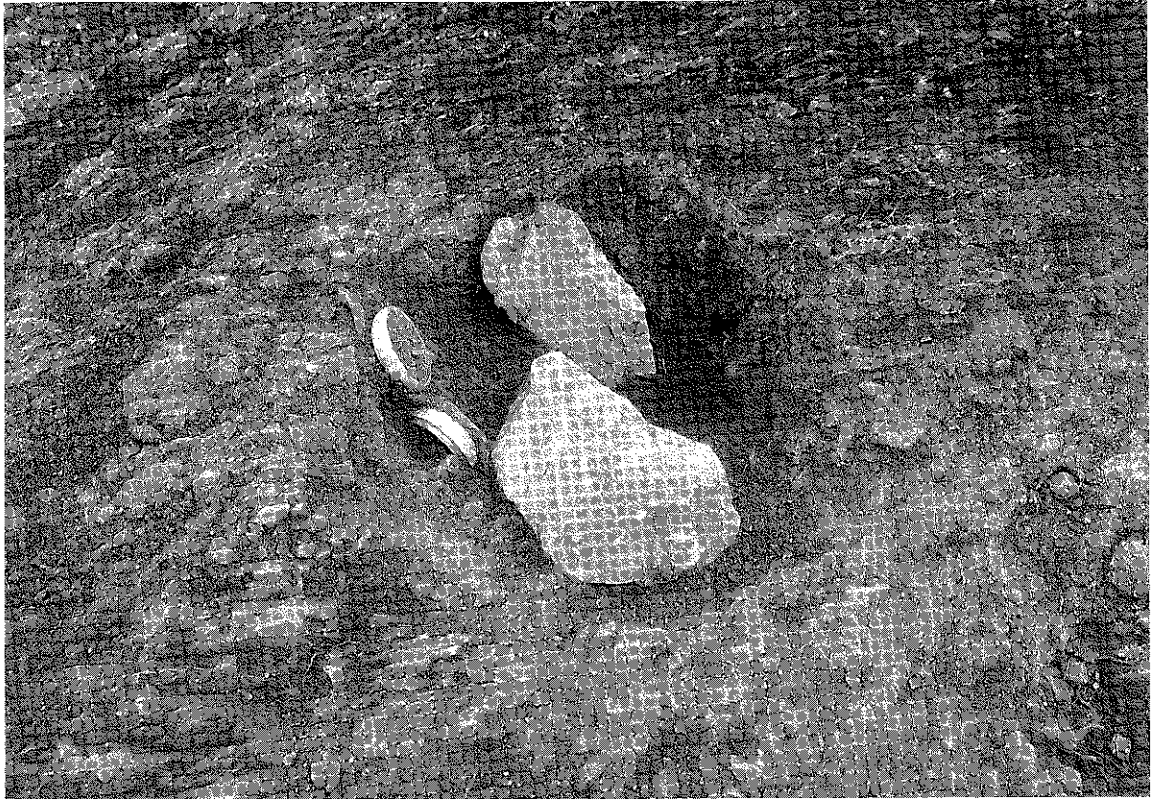




第9図 埋納墳S X01上層遺物〔合子・小壺〕の出土状況（西から）



第10図 埋納墳S X01中層遺物〔鏡・毛抜き・数珠等〕の出土状況（西から）



第11図 埋納壙S X 02上層の検出状況（西から）

想定している。

**土壙S K 04（第7図）** 焼土壙S K 03の北東1 m程の地点で見つかった直径0.3 m程の土壙である。土壙は現状では非常に浅く、0.1 m程しかない。胎土の粗い土器の底部が破片となって出上る。焼土壙S K 03と関連する遺構か。

**経塚S X 05（第7・13図）** 焼土壙S K 03の東側1 m程の地点で直径0.5 m程の土壙中に瓦質製の経筒外容器を検出した。外容器は底部しか残っていないが、出土状況からこの経塚には本来はマウンドが存在していたと判断される。

**土壙S K 06（第7図）** 焼土壙S K 03の北約2 m地点。檜の根株下において遺構の詳細な状況は不明である。北宋銭が10枚出土した。内訳は熙寧元寶1枚、咸平元寶1枚、政和通寶2枚、紹聖元寶2枚、嘉祐通寶1枚、皇宋通寶1枚、元祐通寶1枚、不明1枚である。

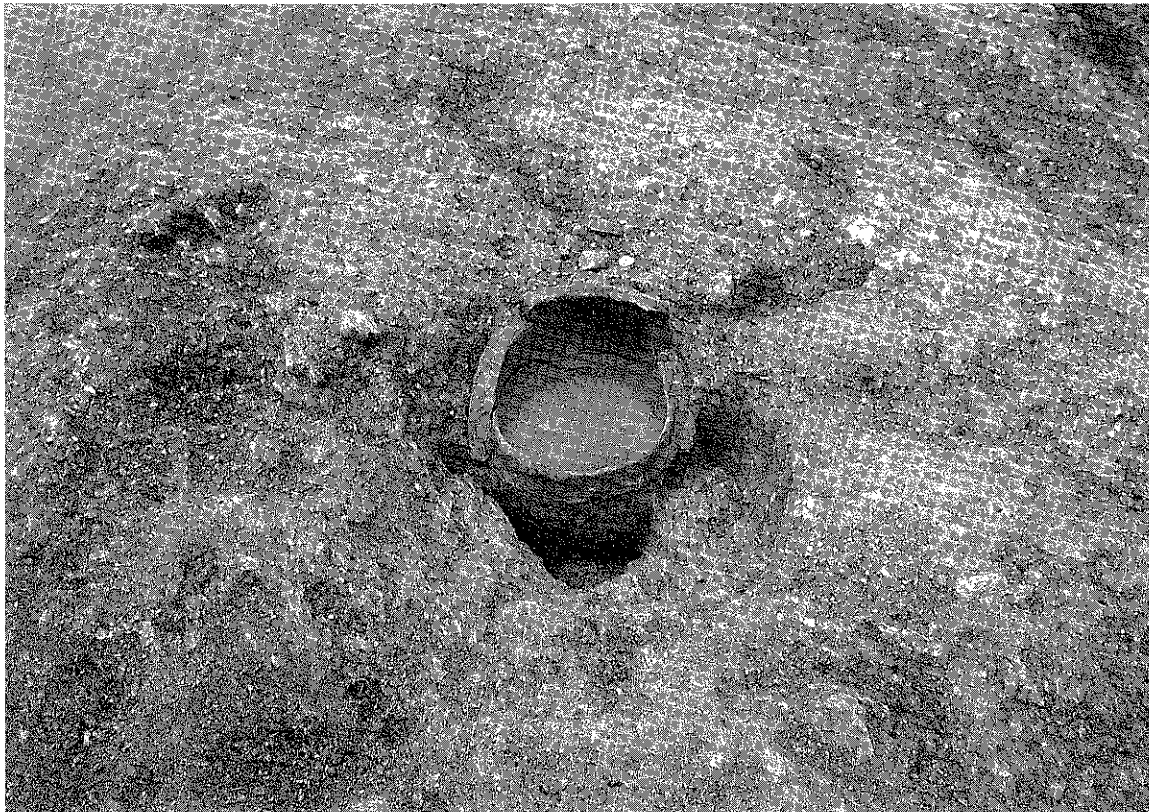
**土壙S K 07（第7図）** 焼土壙の南約3 m地点。直径0.6 m程の方形状に岩盤をくりぬき、土壙を築いていた。その土壙底部に密着するようにして北宋銭が7枚出土した。内訳は大観通寶1枚、元豊通寶2枚、至和元寶1枚、聖宋元寶1枚、元禧通寶1枚、皇宋通寶1枚である。土壙S K 06と共通する北宋銭は皇宋通寶のみである。

その他、遺構との帰属性はとらえられないが、青白磁小壺片・渥美産経筒外容器片・平瓦片が採取された。





第12図 焼土壙S K03 (南から)



第13図 経塚S X05 (南から)

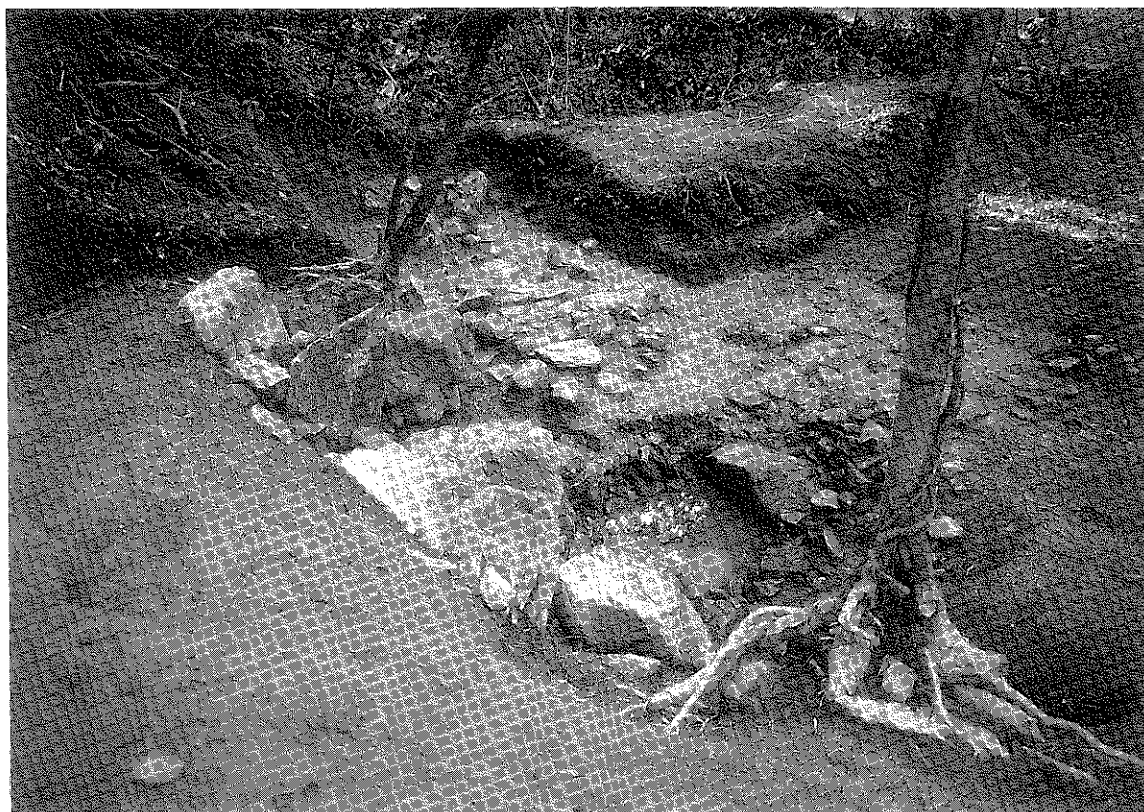
## B. 第4調査区（第14～16図）

この調査区は、幕末作成の『白山宮の図』によって閼伽井の存在が想定された地点である。調査前に当該地の山裾に円形上の窪みを発見し、これが絵図にみえる閼伽井と判断した。このポイントを中心に調査を実施した。閼伽井の立地する平場は、現地形からよみると山裾部を削り、雛段造成によって造り出している。閼伽井はその造成平坦地の山裾部になる。表土を除去すると閼伽井跡からは大量の江戸時代の瓦が出土した。これはおそらく絵図に示す閼伽井の覆屋に葺かれたものであろう。これらを除去して精査すると、閼伽井の四方を取り囲む石組が検出された。井戸本体の調査は、湧水が著しく、今回は不可能であった。閼伽井の南側斜面からは長軸1m、短軸0.6～0.8m程の長軸を縦にした滝石組状の遺構があらわれた。一部は崩落しているものの、本来は9個の石で構成されていたようである。閼伽井の西側では池沿いに閼伽井へと続く石畳の通路が検出できた。概ね2列に石を敷き、両側には石を要所要所に配していた。この閼伽井の南側高所には東西に細長い平場造成があり、その面では建物に伴う地覆石が確認された。規模等から判断して社跡と理解した。さらに閼伽井の北側には小規模な池が広がるのが地形から窺えたが、今回は池岸の一部を検出するにとどまった。閼伽井の水は、ある一定の水量を越えるとこの池に流れ込むような構造となっていた。平坦地全体の調査は来年度の予定である。



第14図 第4調査区閼伽井跡（西から）





第15図 第4調査区閼伽井跡（南東から）



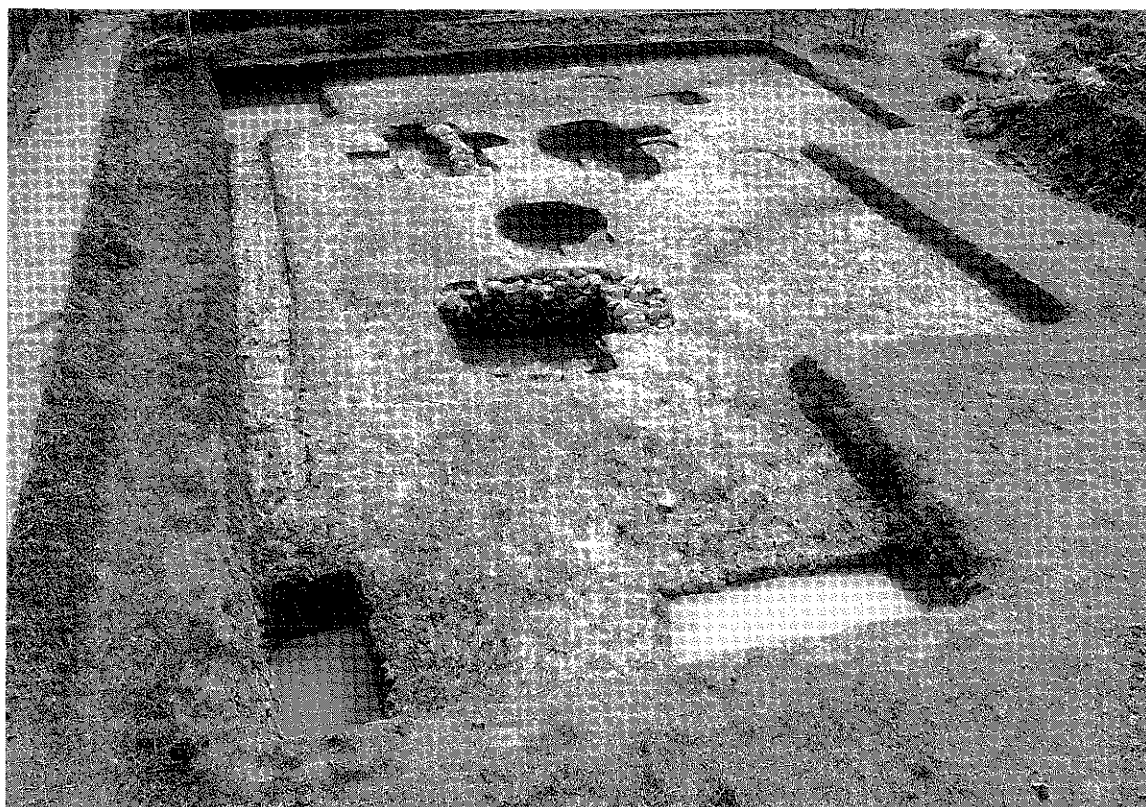
第16図 第4調査区建物跡S B01（南東から）



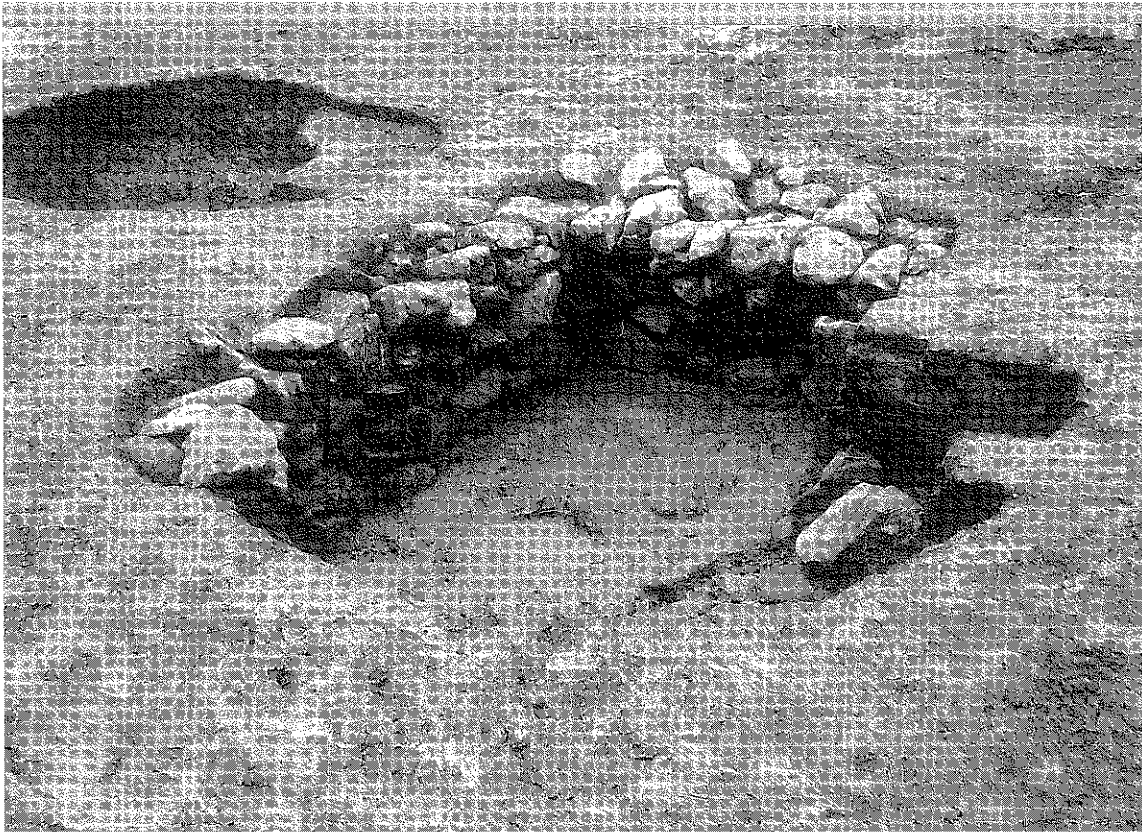
### C. 第1調査区（第17～19図）

この調査区は、金色院最後の坊である福泉坊の跡地である。福泉坊は、近世時の状況は絵図・文書等で明らかだが、中世以前の状況となると判然としない。当該地の金色院創建期（平安時代）の土地利用の状況を解明することがこの調査区での目的である。

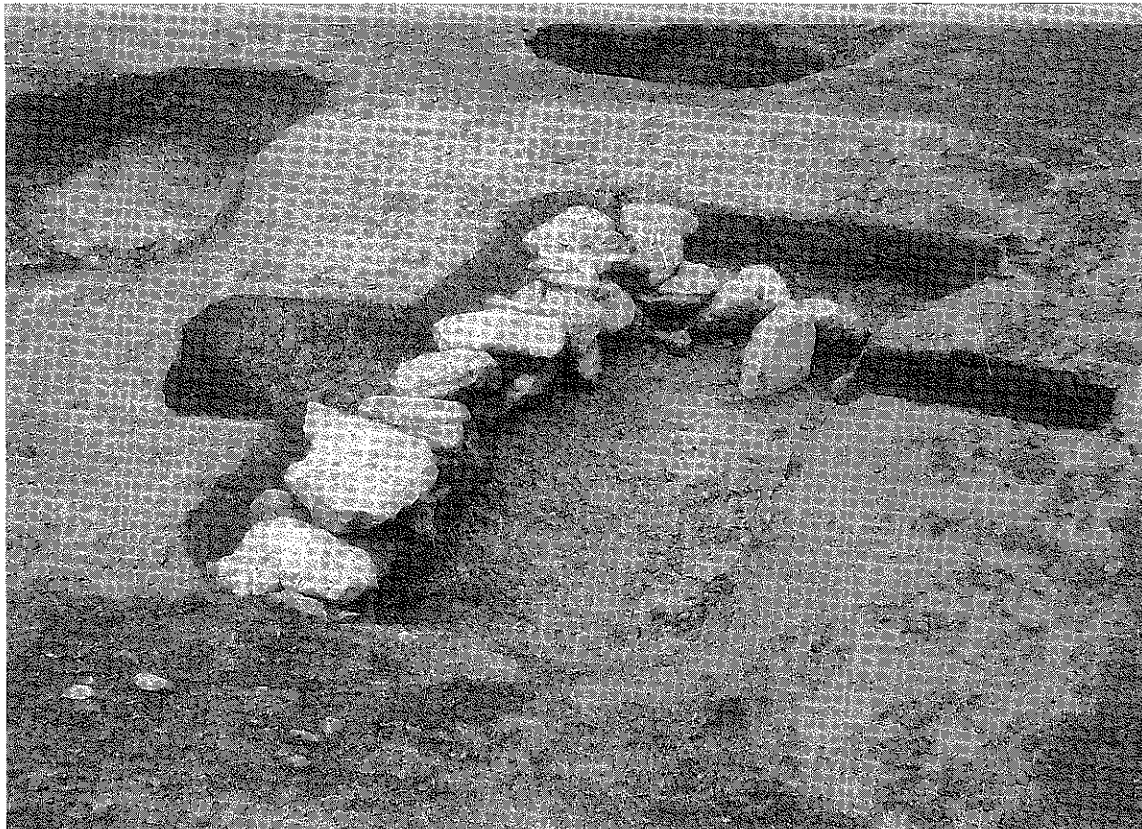
調査では現地表面下約0.3m程で黄褐色粘質土があらわれ、この面上で遺構が確認された。遺物の内容から、検出した遺構は近世期の福泉坊に関連した遺構と理解された。建物構造を理解できる遺構は認められなかった。下層の状況を見るためにトレンチ南東隅を1m程掘り下げた。土層観察し無遺物等から判断して、遺構面は地山上に形成されていると判断された。検出した主要遺構は大きく4か所で、その中で注目されるのが土壇壁面に石を組んだ石組遺構S X01・02である。石組遺構S X01は長軸2.3m、短軸1.5mの長方形の土壇で、深さは50cm程の南・西壁面全体に石が組まれている。北側は攪乱によって土壇の形は判然としないが、底部に石組がわずかながら残っており、北側にも石が組まれていたようである。西側では石組の痕跡はまったく認められなかった。この遺構の性格については今のところ石室の可能性を考えている。埋土中から平安後期の瓦経片が出土した。石組遺構S X03では土壇の西側にしか石組がみられず、その性格は不明。今回の調査では残念ながら中世以前の状況を理解するための資料をえられず、当初の目的は達成できなかった。



第17図 第1調査区トレンチ全景（北から）



第18図 石組遺構 S X01 (北東から)



第19図 石組遺構 S X03 (南東から)

## IV 出土遺物

本年度の調査で出土した遺物の総量は、整理箱にして約10箱におよぶ。本年度は整理作業にじゅうぶんな時間がさけなかったこともあって、ここでは簡単な事実報告にとどめ、詳しい検討は後日に期することにした。

**第1調査区出土遺物** S X01からは瓦経および江戸時代の瓦が、S K01からは江戸時代の陶磁器が出土した。このほか、表土掘削中には江戸時代の瓦や土師器が出土している。基本的には江戸時代以降のものが主体を占めており、中世以前にさかのぼる遺物は確認できない。

このなかで例外的な遺物が瓦経片である(第22図)。非常に精良な胎土を用い、明灰色で硬質に焼き上げられている。のこっているのは瓦経の上端の一部であり、残存長で横5.5cm、縦11.0cmを測る。文字列の方向にわずかに反る。経文は両面に彫られており、経文の順序から凹面部分が表面になることがわかる。罫線は、枠と縦線がそれぞれ約0.1cmの太さでひかれている。文字はだいたい1.0cm角程度だが、間隔はばらばらで、一行の文字数は統一されていない。文字の太さは約0.1cmで、罫線とほぼ同様の工具で彫られていたことがわかる。

経文の釈文を以下にあげる。出典は『妙法蓮華経』巻第七観世音菩薩普門品第二十五である。

[表面]

「善男子勿得恐怖

(是)  
音菩薩名号□

(稱名者於此)  
若□□□□□」

[裏面]

「便生福德智慧

相之女宿殖徳本衆

(若有)  
薩有如是力□□」

**第2調査区出土遺物** 近世の土師器や陶磁器、瓦があるが、いずれも表土掘削中での出土である。

**第4調査区出土遺物** 閼伽井跡の井戸部分やその周辺からは、表土掘削の段階で近世の土師器や陶磁器、瓦が多量に出土した。建物跡S B01からは、表土中で宝珠文軒平瓦、瓦器椀が各1点出土した。前者は室町中期、後者は13世紀代の所産であろう。

**第5調査区出土遺物** 経塚や埋納墳などから、平安末期を中心とした遺物が出土した。こ

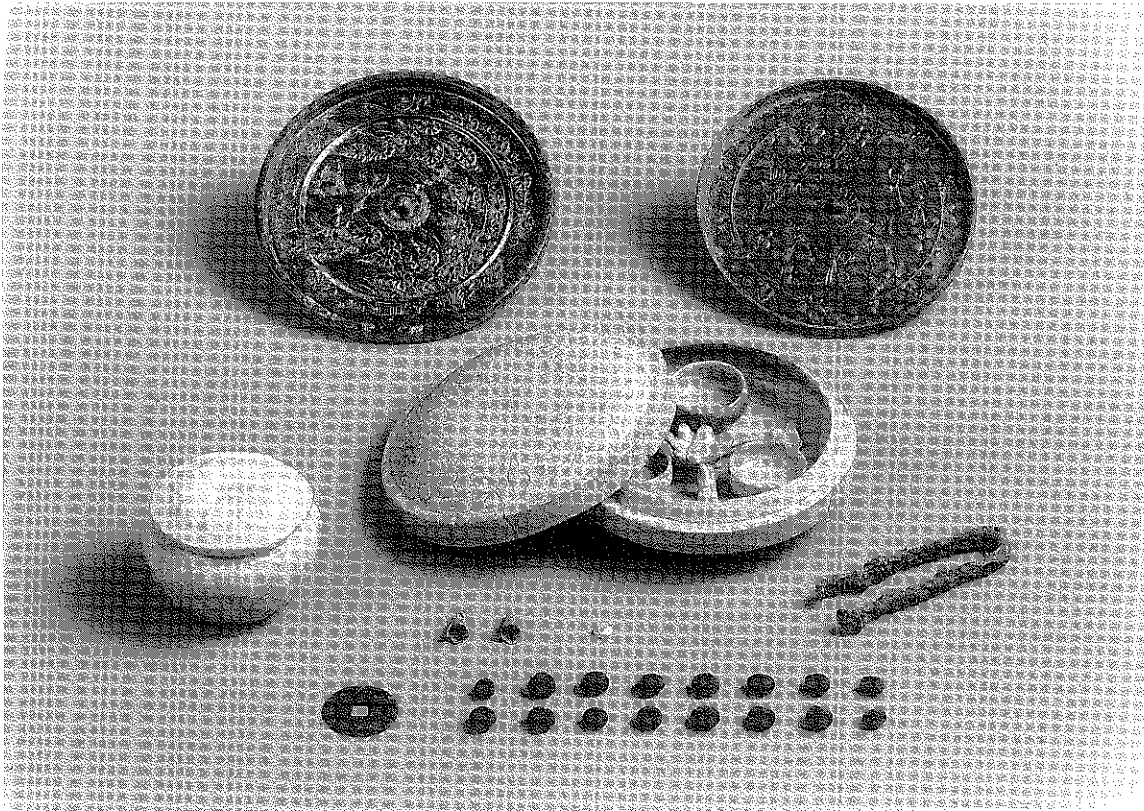
ここでは、さらに遺構ごとにわけて概観することとしたい。

**埋納墳S K01出土遺物**（表紙写真、第20図） 蓋石の直下で、青白磁合子および小壺が完形で出土した。合子は平型のもので、口径10.8cm、器高4.9cm。高台を有する。釉調は淡緑白色。蓋には牡丹の刻花文を施す。身の内部には口径2.5cmの小椀が三つつけられている。いわゆる子持ちの合子である。また中央部には蓮華と茎、葉をかたどった装飾がつけられている。小壺は胴部最大径5.8cm、器高4.5cmを測る。釉調は青白色。蓋には蓮華を、胴部には蓮弁をかたどった装飾を刻む。

これら青白磁の下層からは以下の遺物が出土した。あわせて鉄釘が出土していることから、以下の遺物は木箱状のものに納められ、青白磁2点のみが、じかに埋納されたものと考えられる。

和鏡2面（青銅製山吹双鳥鏡、白銅製秋草蝶鳥鏡）、鉄製毛抜き1本（全長7.0cm）、青銅製瓔珞2点（全長1.5cm、房の飾り金具）、皇宋通寶（初鑄1038年）1枚、ガラス製小玉1点（径0.6cm）、漆塗木製数珠31顆（径0.8cm程度）、不明塗膜片（紙胎、あるいは漆皮の櫛笥か）。

**埋納墳S K02出土遺物** 印花文青白磁合子1点とガラス製小玉9点が出土した。合子は口径6.3cm、器高3.2cmを測る完形品である。ガラス製小玉は鉛ガラス質のもので、径0.5cm程度。出土した時点で白濁していた。同様の品は平成8、9年度調査の文殊堂跡でも出土している。



第20図 第5調査区埋納墳S K01出土遺物



焼土壌S K03出土遺物 土壌上面にて瓦器皿が1点出土。口径8.4cm、器高1.7cmで、見込みに暗文を施す。胎土は精良で、暗黄灰色を呈する。12世紀後半頃のもののか。

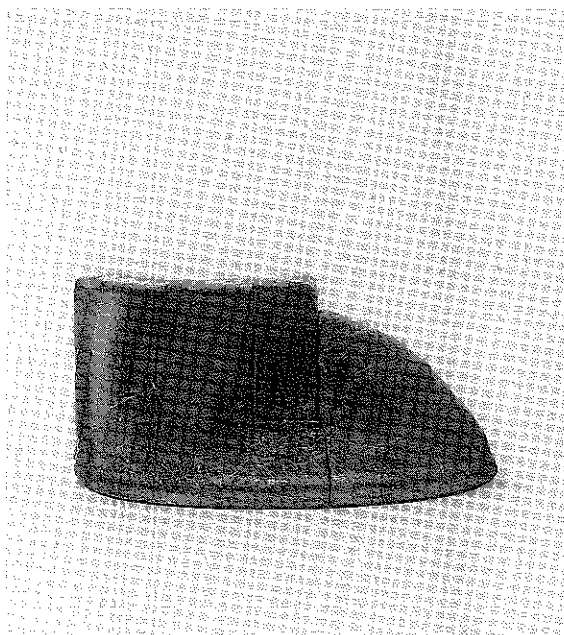
土壌S K04出土遺物 不明土製品が破片で出土。長石粒を多数含むきわめてあらい胎土で、暗茶色を呈する。円筒状の器形に復元可能か。

経塚S X05出土遺物 (第21図) 瓦質の経筒外容器が1点出土。底径30.0cm、残存高14.5cmを測る。胎土は精良で、外面のみ炭素を吸着させる。円筒部分の四分の一程度が残存しており、四周に蓮華座と「 華経」の刻印をおしている。また断面三角形の凸帯が基底部に2条、胴部に少なくとも1条めぐる。

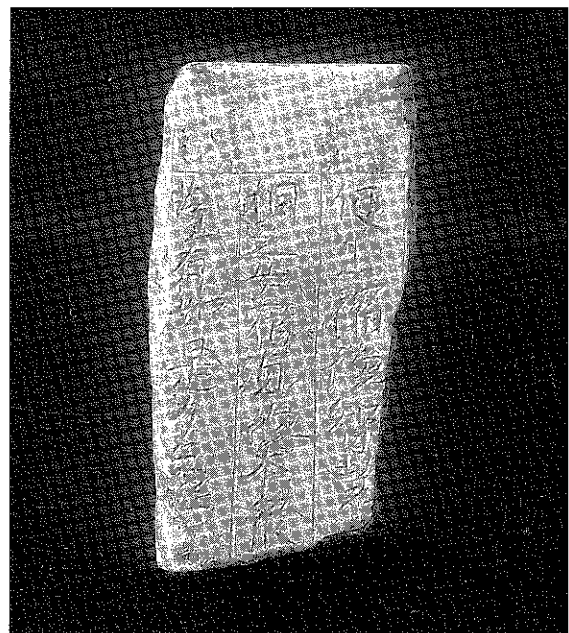
土壌S K06出土遺物 北宋銭が10枚出土した。内訳は、咸平通寶(初鑄998年)1枚、皇宋通寶1枚、嘉祐通寶(初鑄1056年)1枚、熙寧通寶(初鑄1068年)1枚、紹聖元寶(初鑄1094年)2枚、元祐通寶(初鑄1086年)1枚、政和通寶(初鑄1111年)2枚、不明1枚である。

土壌S K07出土遺物 北宋銭が7枚出土した。内訳は、天禧通寶(初鑄1017年)1枚、皇宋通寶1枚、至和元寶(初鑄1054年)1枚、元豊通寶(初鑄1078年)2枚、聖宋元寶(初鑄1101年)1枚、大觀通寶(初鑄1107年)1枚である。

このほか、表土掘削中に青白磁小壺片2点、渥美産経筒外容器片1点、平瓦片1点が出土した。いずれも現位置はとどめておらず、どこに帰属するかは不明である。



第21図 第5調査区経塚S X05出土  
瓦質経筒外容器片



第22図 第1調査区石組遺構S X01出土  
瓦経片(裏面)



## V ま と め

以上、概略ながら今回の発掘調査成果を述べてきた。今年度の発掘は、非常に多くの成果をあげることができた。現段階ではこれらの資料を網羅的に整理できていない。ここでは経塚遺構、閼伽井跡、福泉坊跡の成果について概括したい。

1. 経塚遺構 年代は、鏡の年代観に基づく12世紀中頃から後半に位置付けられる。経筒本体がすでに失われていたのは残念であるが、その他の遺構は非常に残りが良かった。状況から判断すればすべてではないがマウンドをもつ経塚があった。が、それらはすでに調査の段階では全く地上に痕跡をとどめてはいなかった。今回の場合、土壌を掘って地下に造られた埋納壙が明らかとなった。見つかった埋納壙自体の意義付けについては今後の検討課題であるが、輸入陶磁器を始めとする豪華な副納品の存在は注目すべきものがあった。その他では、焼土壌を始めとして埋納時に関わる儀式の痕跡を伝える遺構が数多く検出された。あまり明らかではない経塚埋納儀式を復原する上での重要な資料が得られたと思われる。

2. 閼伽井跡 井戸そのものよりその造形美において注目される。井戸に滝石組や小規模な小池が取り付け、その風景はあたかも庭園を彷彿とさせ、通常イメージされる閼伽井とは異なっている。この違いがどういった意味をもつのかは今後の検討課題である。今回検出した閼伽井は室町中期再興時以降の姿と理解される。それ以前の状況は、今回の調査では明らかにしえないが、注目すべきものに昨年度に検出した閼伽棚の存在がある。12世紀初頭に創建された一間四面堂の西南隅に閼伽棚遺構が見つかったのである。このことは平安時代にはすでに金色院には閼伽井は存在していた可能性を十分に示しており、改変を受けながらも今回検出の閼伽井は平安後期にまで溯る予測もたつ。詳細については来年度の調査で明らかになるものと思われる。

3. 福泉坊跡 近世期の遺構が検出されたものの中世以前の状況は全くわからなかった。当調査地での注目すべきことは、石組遺構SX01より出土した平安後期の瓦経片である。瓦経は、全国的にみてそれほど出土しないようであり、そのことを踏まえれば、その重要性は自ずから明らかであろう。ただなぜ近世の遺構に伴って出土したのかは不明である。

今回の発掘調査によって白川金色院の具体的な姿がかなり鮮明になった。来年度以降の調査では、これらの成果を十分にふまえながら、往時の金色院の姿を復原していきたい。

最後に土地所有者各位、地元白川区を始め、調査期間中や整理作業中に御指導いただいた多くの方々に心よりお礼を申し上げ、本報告の終わりとしたい。



## B. 平等院旧境内遺跡発掘調査概報



## I はじめに

平等院は、末法初年にあたる永承7（1052）年に藤原頼通によって創建された寺院で、翌天喜元（1053）年に鳳凰堂（阿弥陀堂）が落慶供養、以後師実・寛子・忠実等の頼通一門により境内地に数多くの堂舎が建立された。寺域は現境内よりも広大であったことが記録、地形、地割等から想定されており、平等院旧境内遺跡は、このようなかつての境内地を埋蔵文化財包蔵地として認識するもので、遺跡範囲は南北400m、東西300m程を占める。近年の旧境内地での調査では、四條宮寛子創建の多宝塔跡と想定される基壇建物跡を始めとして、国史跡・名勝指定平等院庭園と異にする平安期の庭園跡等が確認され、在りし日の平等院全体の景観を復元する上での資料が徐々に蓄積されつつある。

今回の調査は、塔川116番地と塔川7-1番地他において計画された造成工事に先立ち実施したものである。調査期間は前者が平成9年8月11日から同年8月14日までで、後者が平成9年9月9日から同年11月12日までである。調査面積は合計300㎡である。土地所有者である岩井勘造氏を始めとする岩井家の方々には全面的な御協力を頂いた。感謝したい。



第23図 国宝平等院鳳凰堂（東から）



## Ⅱ 調査の経過

調査地は、塔川116番地と塔川7-1番地他の2カ所にまたがり、造成日程上、調査期間を2つに分けて調査を行った。まず造成が先行の塔川116番地（第1調査区）より調査を開始し、その後で塔川7-1番地他（第2調査区）の調査を行った。

第1調査区は、造成の日程上、調査期間がとれないため遺構の有無を調査の中心課題とし、土層の状況を逐次確認しながら、重機で通常の調査よりも早く掘り下げた。現地表面下約1.5mで6～14世紀の遺物とともに礎石の根石等が確認できたことから、その面で遺構の確認を行った。遺構の全容がほぼ明らかになってから、トレンチの位置図・平面図・土層断面図を作成し、写真撮影をすることによって全記録を終了した。その後、ただちに掘削土砂での埋め戻し作業を行い調査を終了した。調査面積は計50㎡であった。

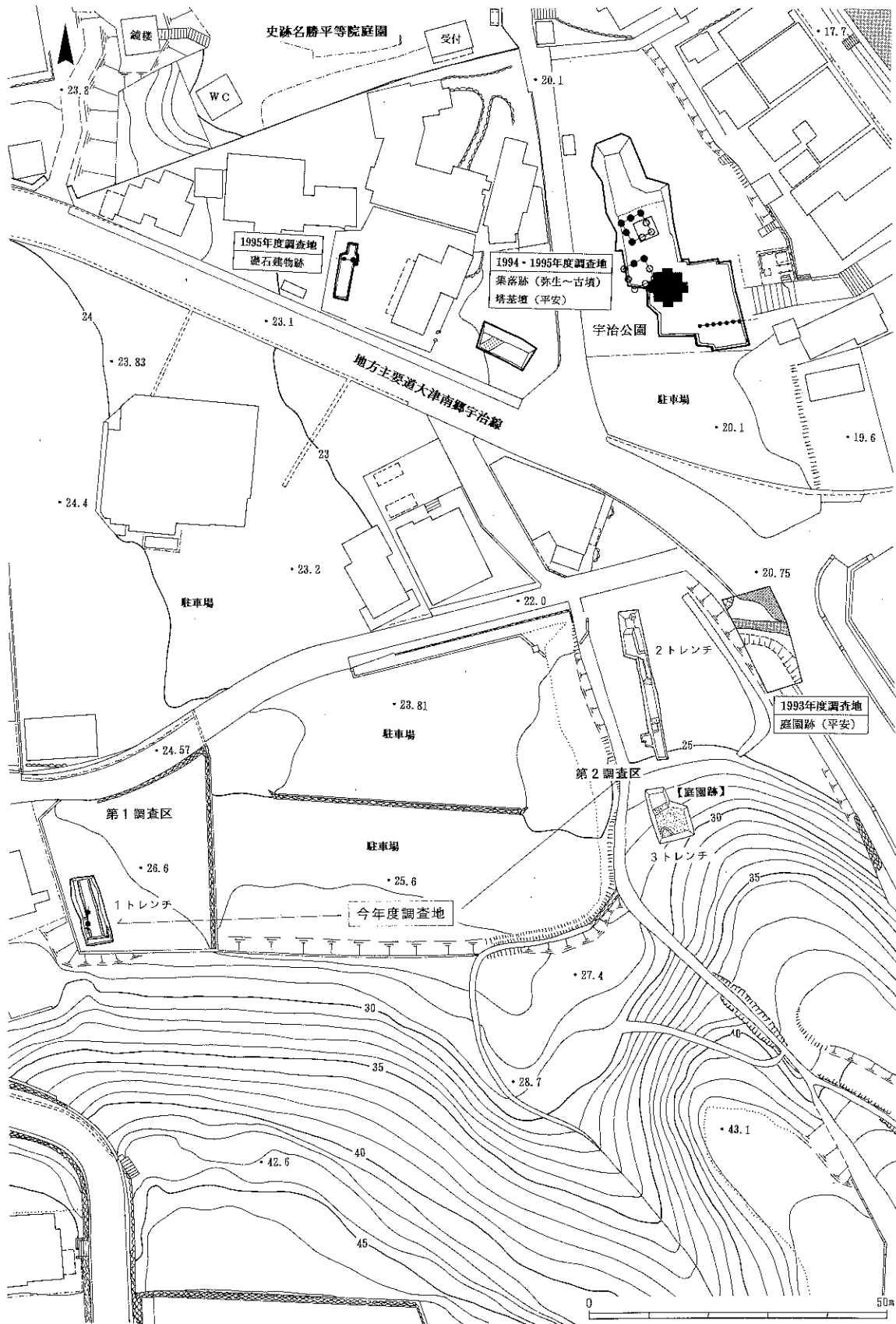
第2調査区は、調査区北端部が平成5年度発掘調査で検出した平安期の庭園跡の西隣接地にあたり、その庭跡の続きが想定された。このため、まず北端部にトレンチを設定し重機によって掘削作業を開始した。想定通り、前回検出レベル面で礫敷が確認できた。ただ、地表面から遺構面までの置土が非常に崩れやすく、作業の安全化のためのトレンチ法面が樹木との関係上確保できないため、確認調査だけにとどめた。その後は南側山裾に向かって細長い試掘トレンチを設定し掘り広げた。南山裾で地表面から0.7m程下で厚さ1mにも及ぶ腐植堆積層が確認されたため、その地点を可能な

範囲でトレンチを拡張した。この堆積層は上層は平安期、下層は古墳期の遺物が含まれていた。堆積層検出面より地区割りを設定し、層位的に掘削、状況に応じて図面作成、写真撮影を行った。掘削半ばで、平安期庭園跡の存在が確認された。遺構の状態が良好なため、下層は試掘トレンチ内で確認した。発掘調査終盤の10月27日において報道への発表を行った。その後部分的に断割を行い、可能な限り遺構の詳細確認に努めた。埋め戻しは掘削土砂で埋め戻し、11月12日に調査を完了した。調査面積は250㎡で、発掘調査面積は計300㎡となった。



第24図 下駄発見時の状況





第26図 発掘調査地点図

### Ⅲ 検 出 遺 構

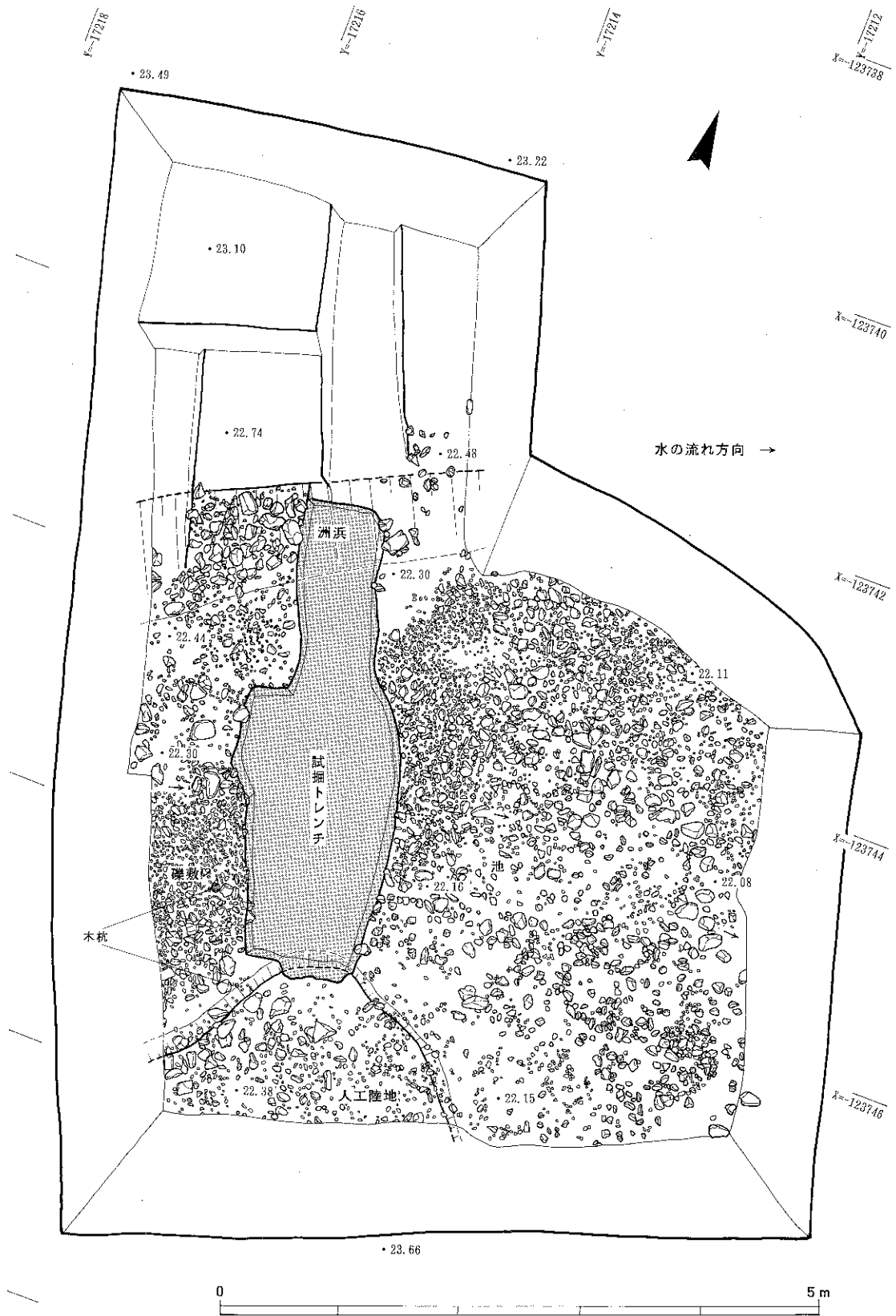
今回の発掘調査は大きく2カ所に地区が分かれるため、調査の先後関係より塔川116番地を第1調査区、塔川7-1番地他を第2調査区と設定した。第1調査区では規模・時期等の詳細は不明ながら、礎石建物跡を検出することができ、第2調査区では南山裾側に設定したトレンチで平安後期の庭園跡を発見することができた。ここでは第2調査区より遺構の概略を述べていく。

#### A. 第2調査区（第27～33図）

調査地の地形は、北側の段丘面、南側の丘陵部の2つに概ね分けられる。丘陵部は踏査では、人為的な痕跡が認められなかった。このため今回の調査は、北側段丘面を中心に調査を行った。トレンチは南北に細長いトレンチを2本設定し、北側を1トレンチ、南側を2トレンチとした。1トレンチでは北端部で段丘の落ち込みとその下に集石部を確認した。前述したようにその集石部は、平成5年度調査で検出した庭園跡との繋がりが考えられた。1トレンチではその他に、建物跡と池跡とを確認した。これらは、土地所有者である岩井勘造氏のご教示によって近世の別荘跡と理解できた。2トレンチでは、現地表下約1.2mで平安期の庭園遺構が検出された。庭園の下層からも古墳時代の遺物包含層が確認できたが、庭園遺構の残りが極めて良いため、下層部は試掘トレンチ内での部分的調査にとどめた。ここでは調査成果の主となる平安期の庭園遺構について述べていく。

#### 2 トレンチ（第27～33図）

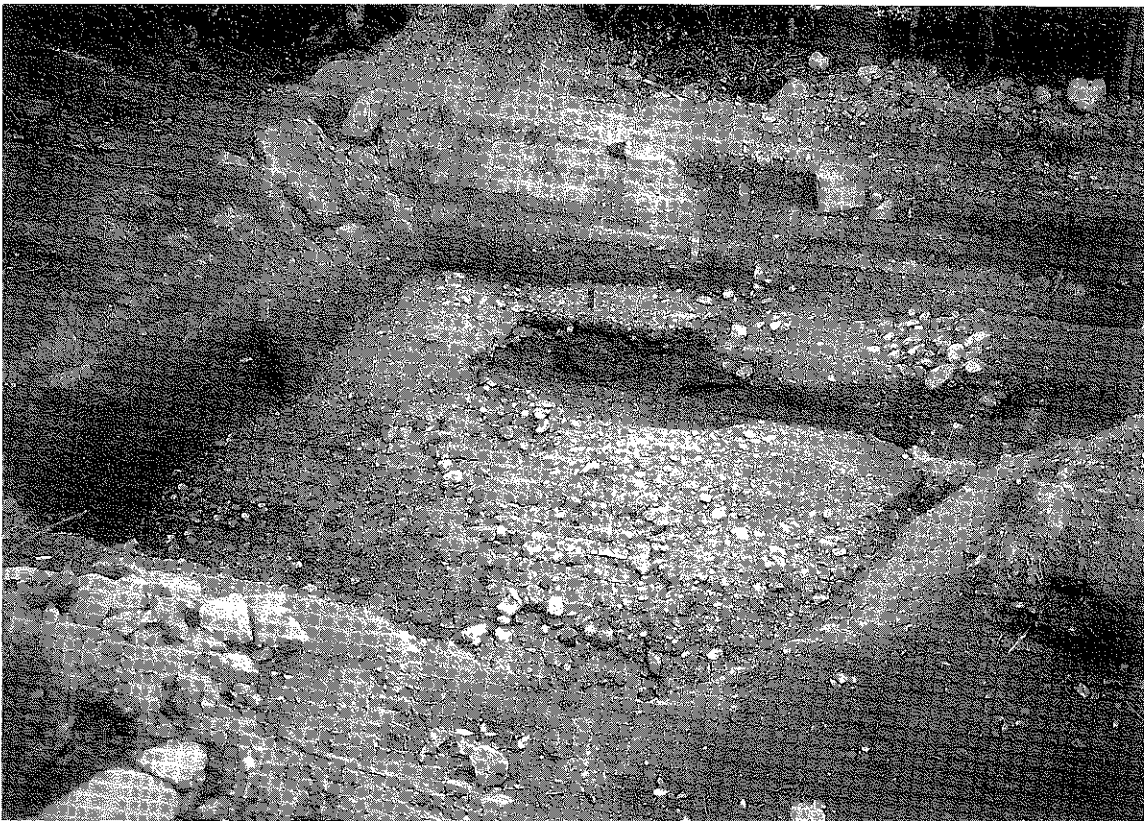
**土層の状況** 基本的には比較的単純な平行堆積状況を示す。地表面から約0.7m程までが最近の置土（砂質土）である。この厚い置土を除去すると褐色系の腐植堆積層があらわれ、中に土器が混在しているのが確認できた。この堆積層を除去すると平安期の庭園跡が現れた。この腐植堆積層は、土層断面では何層にも分別が可能であるが、平面上での堆積経過は細かくとらえられなかった。ただし、概ねではその堆積状況の経過をとらえることができた。堆積層を便宜上、上層・中層・下層に分けると、土器・瓦・木製品等の遺物は中・下層に出土する傾向にある。遺物はいずれも細片で、流動性が高い。トレンチ四方の土層断面観察から、中・下層の堆積は、池底の傾斜状況と同じで、西から東へ傾斜しながらの堆積状況を示す。上層はこれとは異なり、ほぼ水平な堆積状況である。後述するが、この庭園は谷筋を利用して作庭されたものであり、谷地形そのものをほぼ踏襲しているようである。すなわち中・下層の堆積段階では谷地形はそのまま残存して水は流れていたが、上層の堆積頃では水の流れが遮断され湿地状の溜まりとなっていたものと想定される。平安期庭園跡の下層は、試掘



第27図 第2調査区2トレンチ庭園遺構平面図



第28図 2トレンチ庭園遺構全景（南から）



第29図 2トレンチ庭園遺構全景（東から）





第30図 池底の風景（南東から）



第31図 洲浜の出土状況（東から）

トレンチで確認した結果、腐植堆積層とその下に砂質土層が確認された。いずれも古墳時代初頭と中心とする遺物が数多く出土した。トレンチの制約上旧谷地形のラインは検出できなかった。

**庭園跡** 非常に良好な状態で確認できたが、一部の確認であり庭園の全体像は今後の課題である。この庭園は谷地形を利用して作庭されていることが現地形より窺い知られる。谷筋は調査区西側の山中に確認でき、その谷筋の延長線上に当該地がくるようである。また状況から判断するとこの庭園の中心は本トレンチの西側に推定される。では検出した庭園の概要を述べていく。

**洲浜** トレンチ北西側で確認できた。調査ミスもあり、洲浜を一部除去してしまった。洲浜はわずかに湾曲しながら東西方向に伸びる。北側が陸地、南側が園池となる。陸地部には白砂が多量にみられた。多宝塔調査で園路の白砂使用が確認されており、実態は不明ながらこの白砂層も人為的なものと考えて良からう。使用された石の大きさは不統一で、重層的には敷かれない。洲浜の傾斜角は $16.3^\circ$ で、洲浜では急傾斜の部類とならう。谷地形を踏襲したことに起因するものか。

**池底** トレンチ西端で22.4m、東端で22.1mを測り、西から東へ緩傾斜する。池底には大小様々の石が散乱していた。この状態から旧状の復元は不可能である。ただしこの面以外では石を多く多く含む堆積層がないことから、谷筋から園池に改変する際に人為的になされたものであることは間違いなからう。



第32図 石敷の検出状況（南から）



第33図 石敷と木杭（南から）

**人工陸地** トレンチ南端で淡黄褐色土系の薄く堆積した部分が確認できた。この堆積層はトレンチを越えて南の山裾側に延びている。この層は池底面上に堆積するもので、非常に安定した地盤を形成する。この層の下層を確認するために断割を行ったところ、下層部分には池底よりも大きめの石が詰め込まれていた。人工的に造られた陸地上のものであることは間違いないが、その位置付けについては今のところ定かでない。池中にしつらえた小島の一部かもしくは岬の先端部のどちらかであろうと今は考えている。

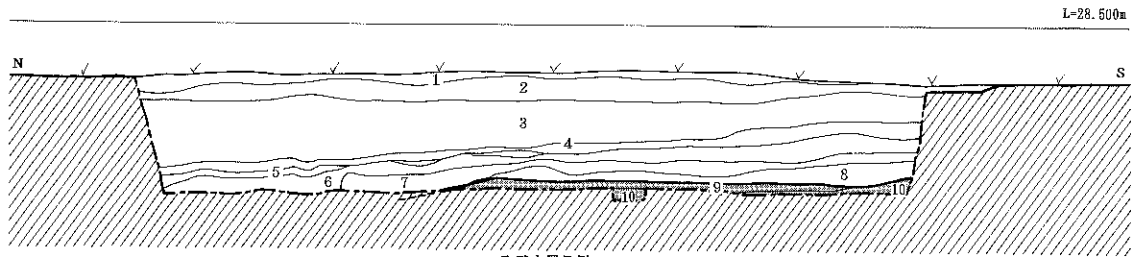
**礫敷** この陸地部北側で確認できた礫敷で、非常に細かな礫が充填されている。南北1.8m程の広がりをもつ。東西範囲は不明。池底は礫敷の下層にみられ、池底と礫敷との間には腐植堆積層がかんでいる。このことから、庭園の改変が一度あり、その際に造られたものと思われる。礫敷の南側すなわち人工陸地部側に直径10cm程の細い丸杭2本が穿たれていた。

## B. 第1調査区(第34・35図)

この調査区は、南泉房想定地の西端に位置する。遺構の有無確認を主体とする調査であったが、礎石建物を確認する等の予想以上の成果をあげることができた。なお遺構面は地表面から1.5m下で造成はとどかないため、遺構は無事保護された。

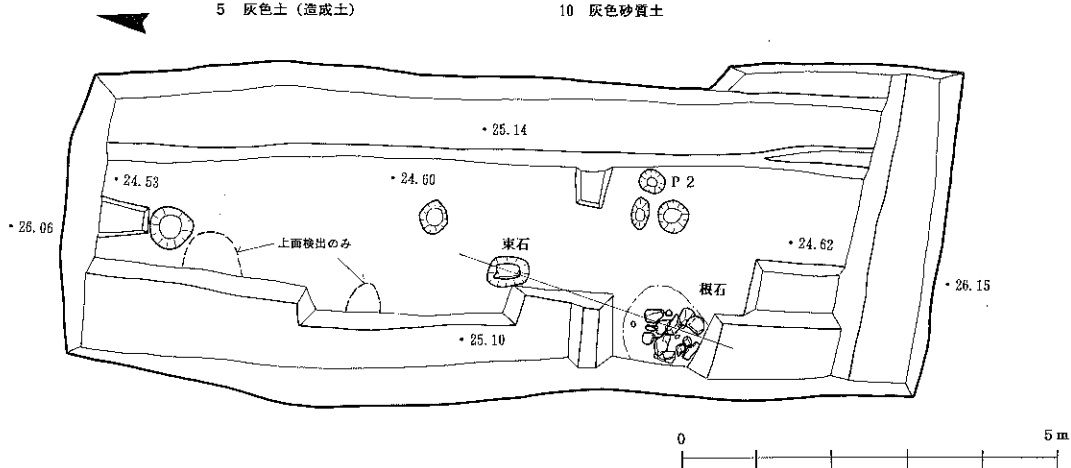
**土層の状況** 基本的には比較的単純な平行堆積状況を示す。遺構面のやや上層にあたる暗灰褐色土層からガラス瓶の破片が出土し、また土層の状況から遺構面までの堆積層は造成による土盛りと判断される。これらを掘削除去すると、土師皿・瓦等を含む淡褐色土層があらわれ、その下層に遺構基盤土層となる淡青灰色砂質土が検出された。この基盤層で礎石建物が確認できた。基盤層は北へ漸移傾斜しており、時間の関係上トレンチ南半分のみを検出にとどまった。当地一帯の旧字名を「白谷」という。白谷の名はこの基盤層の色に由来するものか。

**礎石建物跡SB01** 検出したのは礎石抜き取り痕1か所と束石1個である。建物の規模は不明である。建物は主軸を真北方向にとる。抜き取り痕と束石との距離は約2.1mである。抜き取り痕は直径1m程で、充填された根石の大きさは0.4m程を測る。束石は直径0.3m程である。束石は、束石がちょうど入る程の穴を掘り込み、その底に設置している。そして束石上に束柱を据えて、柱と穴の隙間を土で埋め戻し、柱を固定化していると考えられる。このため、束石は地上には露出しない。



東壁土層凡例

- |                         |                        |
|-------------------------|------------------------|
| 1 茶褐色土 (表土)             | 6 暗灰褐色土 (瓦・ガラス等含む、造成土) |
| 2 褐色土 (表土)              | 7 暗青灰色土                |
| 3 黄褐色土 (瓦含む、造成土)        | 8 淡褐色土 (土師皿・瓦等含む)      |
| 4 暗灰色土 (瓦・陶器・磁器等含む、造成土) | 9 青灰砂質土 (遺構基盤層)        |
| 5 灰色土 (造成土)             | 10 灰色砂質土               |



第34図 第1調査区トレンチ実測図



第35図 第1調査区トレンチ全景 (北から)



## IV 出土遺物

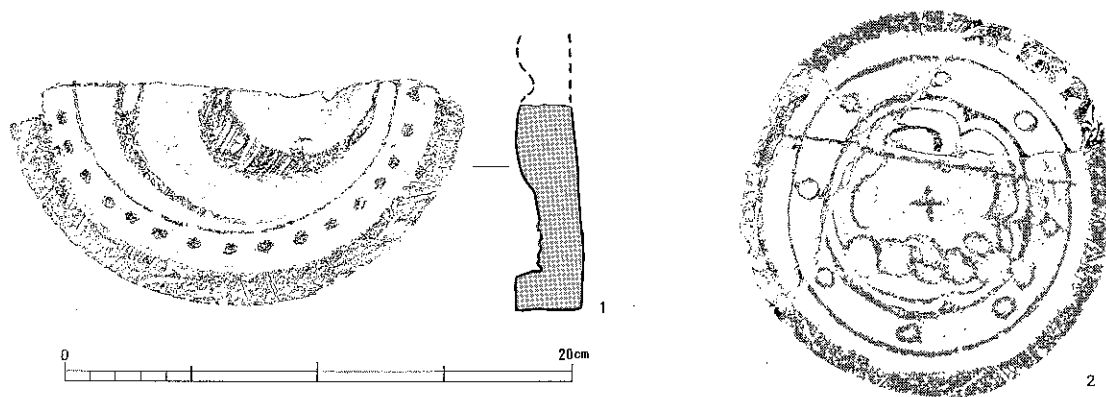
今回の調査では、整理箱36箱におよぶ遺物が出土し、その種類は瓦・土師器・瓦器・須恵器・陶磁器・木製品などである。遺物は細片化が著しく、全体をうかがえるものは少ない。

### A. 第2調査区庭園遺構出土の遺物（第36～38図）

池跡を覆う腐植堆積層出土の遺物について概要を述べる。軒丸瓦（第36図）は、三巴文（1）、珠文縁花文（2）が出土した。土器・陶磁器類（第37図）は、土師器皿（1～43）、瓦器碗（44）、瓦器皿（45）、白磁碗（46・47）、瓦器釜（48）、篠産鉢（49）が出土した。土師器皿は、Ⅰ：体部が直線的に外上方へ立ち上がるもの、Ⅱ：体部を外側へ折り曲げ、口縁端部を直上へ突出させるもの、Ⅲ：口縁部が内側へ強く折れるものに分類できる。Ⅰは、①口縁部が外反するものと②外反しないものがあり、①では外反の強いもの（1～6）と、弱いもの（7～9）があり、②では、口縁端部が尖りぎみに丸く終わるもの（10～17）と、口縁端部外面が面取り状になるもの（18）がある。Ⅱは、口縁端部の断面が三角形を呈するもの（19～23）、口縁端部外面に垂直の面取りを行うもの（24～27）、口縁端部の断面が丸いもの（28～31）、体部の折れが弱いもの（32・33）に分けることができる。Ⅲは、口縁部の折れが深いもの（34～37）と、浅いもの（38～41）に分けることができる。42は高台、43は三足がつくものである。木製品（第38図）は、木球（1・2）、不明木製品（3）、下駄（4）などが出土している。年代は、11世紀後半を中心とするものと考えられる。

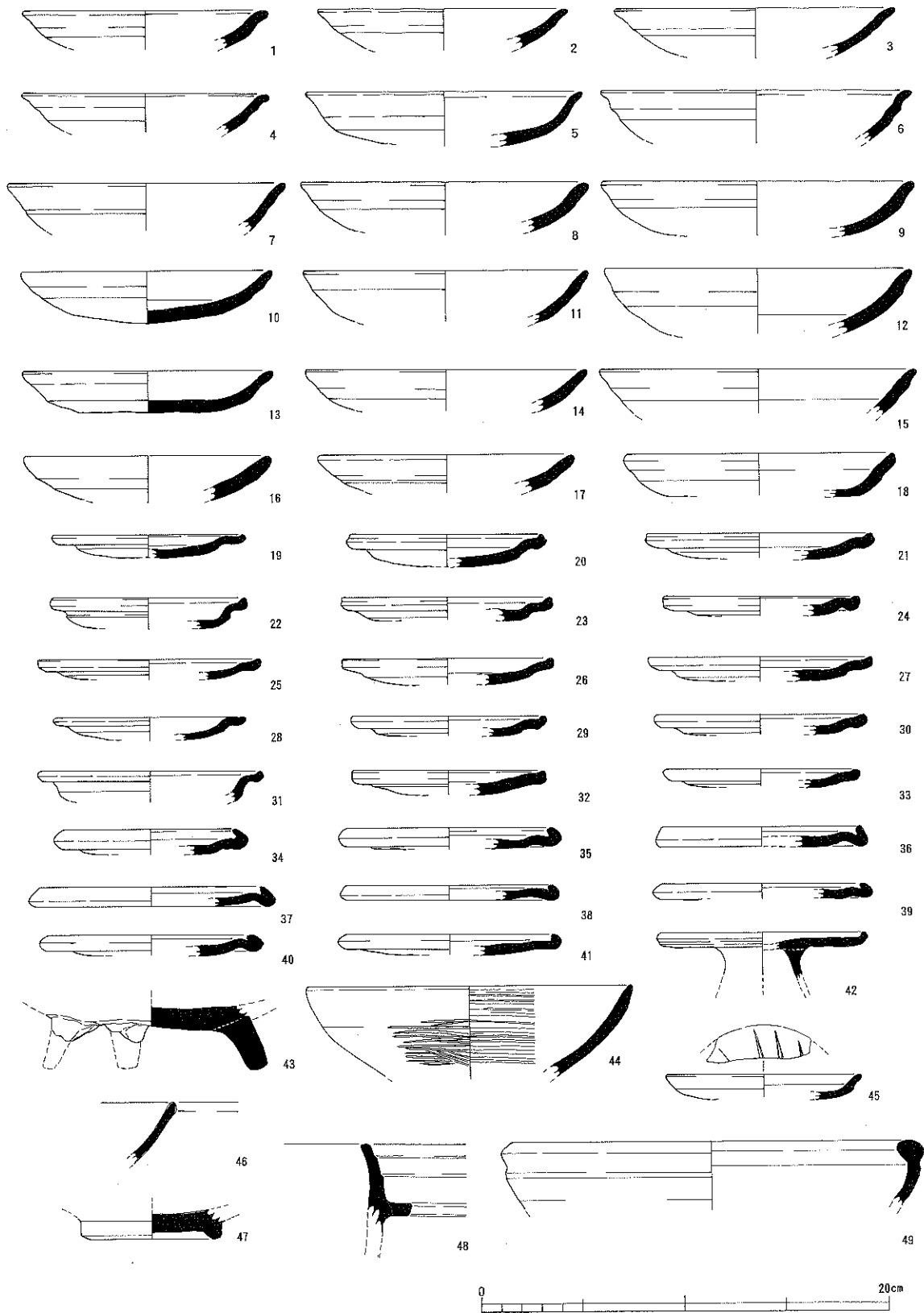
### B. 第1調査区出土の遺物（第38図）

根石下より、土師器皿（5～7）が、根石直上より東播系甕（8）、土師器皿（9）が、



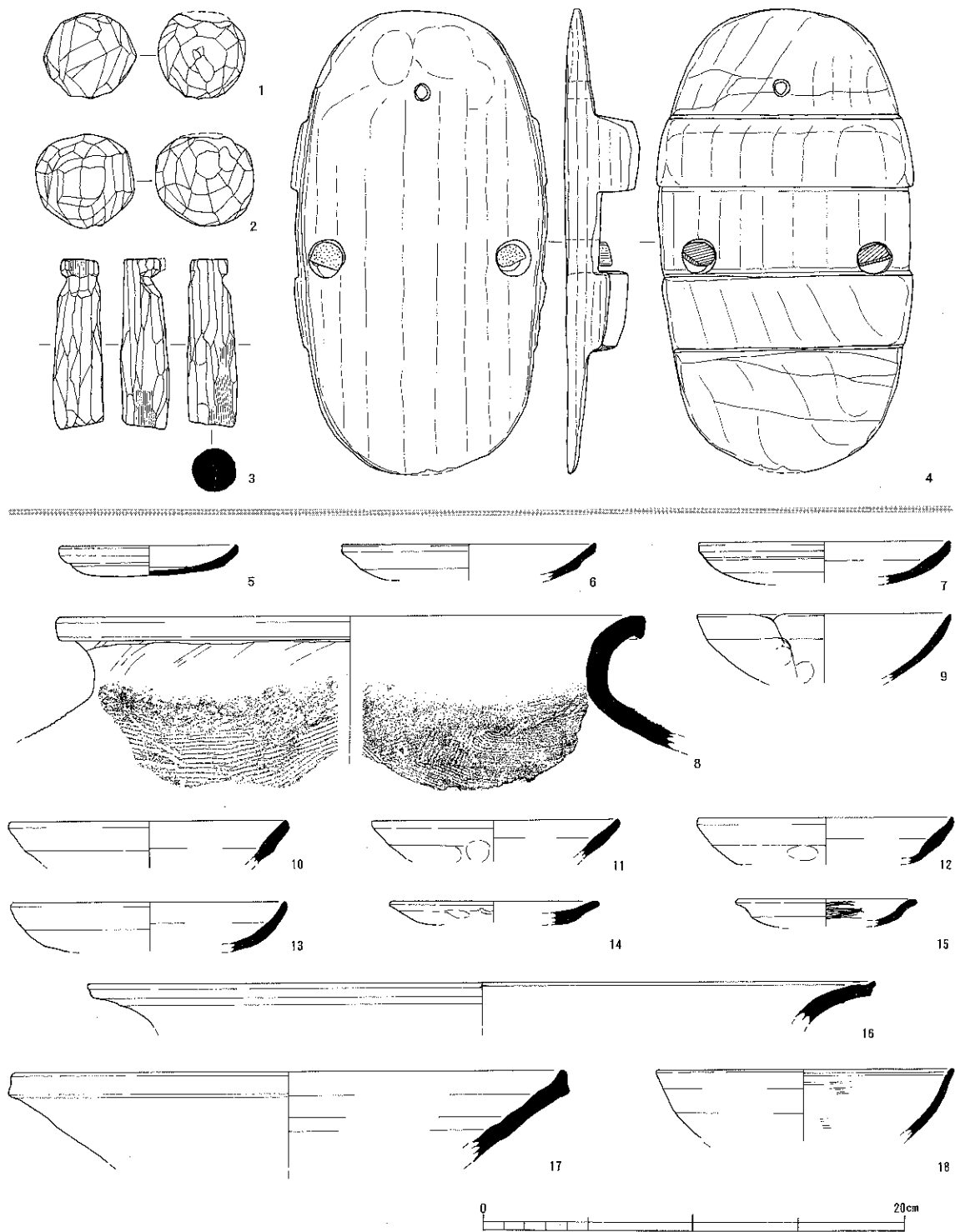
第36図 第2調査区3トレンチ出土遺物(1)（1・2軒丸瓦）





第37図 第2調査区3トレンチ出土遺物(2)  
 (1~43; 土師器、44・45・48; 瓦器、46・47; 白磁、49; 篠産須恵器)

建物遺構直上層より、土師器皿 (10~14)、瓦器皿 (15)、常滑産甕 (16)、東播系鉢 (17) が、ピット 2 より瓦器碗 (18) が出土した。年代は、12世紀後半~14世紀初頭と考えられる。



第38図 第2調査区3トレンチ出土遺物(3) (1~4; 木製品)  
 第1調査区1トレンチ出土遺物 (5~7・9~14; 土師器、  
 8・17; 東播系須恵器、15・18; 瓦器、16; 常滑産陶器)



調査によって検出された。この塔は、四條宮寛子によって建立された。検出地点は鳳凰堂の南東約100mのところであり、数多く造営されたにもかかわらず不明となっている平等院諸堂の一つがこの発掘で初めて明らかとなった。この塔が見つかったことによって経蔵の位置がある程度推測された。経蔵は平等院現境内の南側にある駐車場の北部付近に概ね想定でき、その位置を示したのが第39図である。そしてその南側にかけてあったのが南泉房である。南泉房の推定範囲は、現地形を踏まえると現在暗渠となった塔の川を北限、山裾を南限とする広い範囲が想定される。今回検出された庭園跡はこの南泉房に伴う庭の可能性が高いと思われる。1トレンチで見つかった建物跡も、南泉房建物の一つとして可能性はたつが、ここでは今後の課題として保留しておきたい。ただし仮にそうであったとしても、位置的にみれば中心的施設ではなからう。

以上、今回見つかった庭園が南泉房に伴うものである可能性を述べてきた。南泉房は、『宇治拾遺物語』の原典ともなる『宇治大納言物語』が執筆されたところとされ、古典文学の世界では著名な坊院の一つである。『宇治大納言物語』を書いたのは源隆国（1004～1077）で、藤原頼通とはいとこ関係にあたる。『宇治大納言物語』そのものは今はないが、『愚管抄』によれば、藤原頼通はこの源隆国に父道長の内実を語っており、隆国はそれを書き記したとされる。興味深い内容であり、残っていないのはくやまれるが、今後はこの源隆国の動向も頭のかたすみにいれて、華やかだった平安時代の宇治解明に力を注ぎたい。

（参考文献）

「平等院旧境内多宝塔推定地第2次発掘調査概報」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第26集 宇治市教育委員会 1995

### C. 大鳳寺跡発掘調査概報





## I はじめに

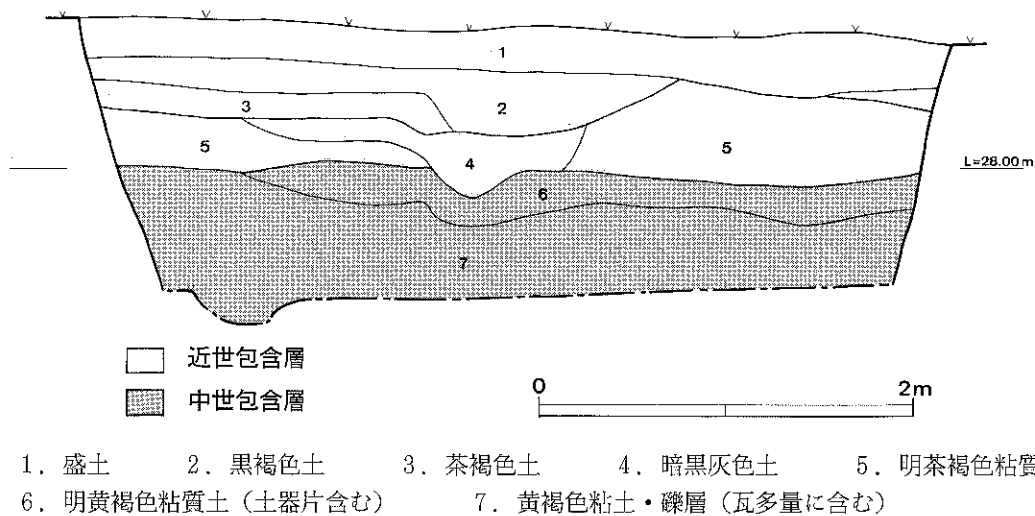
本報告は、菟道西中10番地の1他において実施した、共同住宅建設に伴う大鳳寺跡の発掘調査の概要である。

大鳳寺は、菟道西中を中心に広がる白鳳時代創建の寺院で、過去7次にわたる発掘調査が実施されている。このうち第5次調査では、瓦積基壇を持つ金堂跡を確認しており、法起寺式伽藍配置が想定されている。また寺域については、東西南北とも112mの規模を持つことが想定されている。今回の調査地は、想定される寺域の北西部にあたり、周辺ではかつて第3次・第4次調査が行われた地点である。この調査では寺域の北限を示す溝などを検出しているが、その周囲からは多量の瓦が出土しており、何らかの建物があったことが想定されていた地点である。

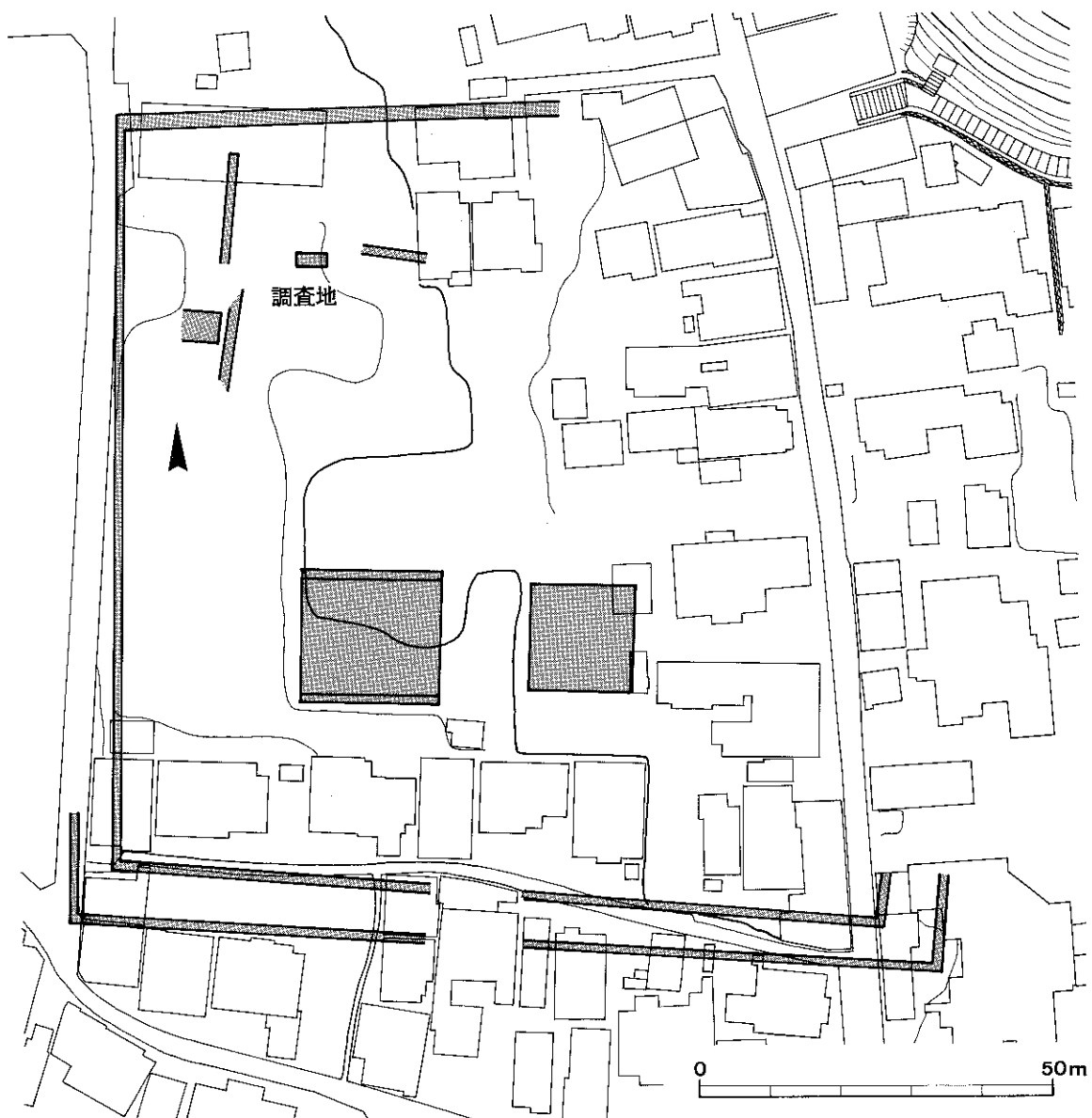
今回の調査地は、前回の調査成果から厚い盛土があることが判明しており、建物の基礎掘削深度が遺構面に達しないことが明らかとなったため、浄化槽部分についてのみ調査を行うこととした。調査は、平成9年7月7日から15日まで行い、調査面積は8㎡である。

## II 調査の概要

今回の調査は、1.8×4.5mのトレンチを設定して行った。調査地の層序は、黒褐色土系の盛土および表土があり、次に明茶褐色粘質土の近世包含層がある。そして黄褐色粘質土系の中世遺物包含層がある。今回の調査では、この中世遺物包含層から多量の瓦と若干の土器が



第40図 トレンチ断面図

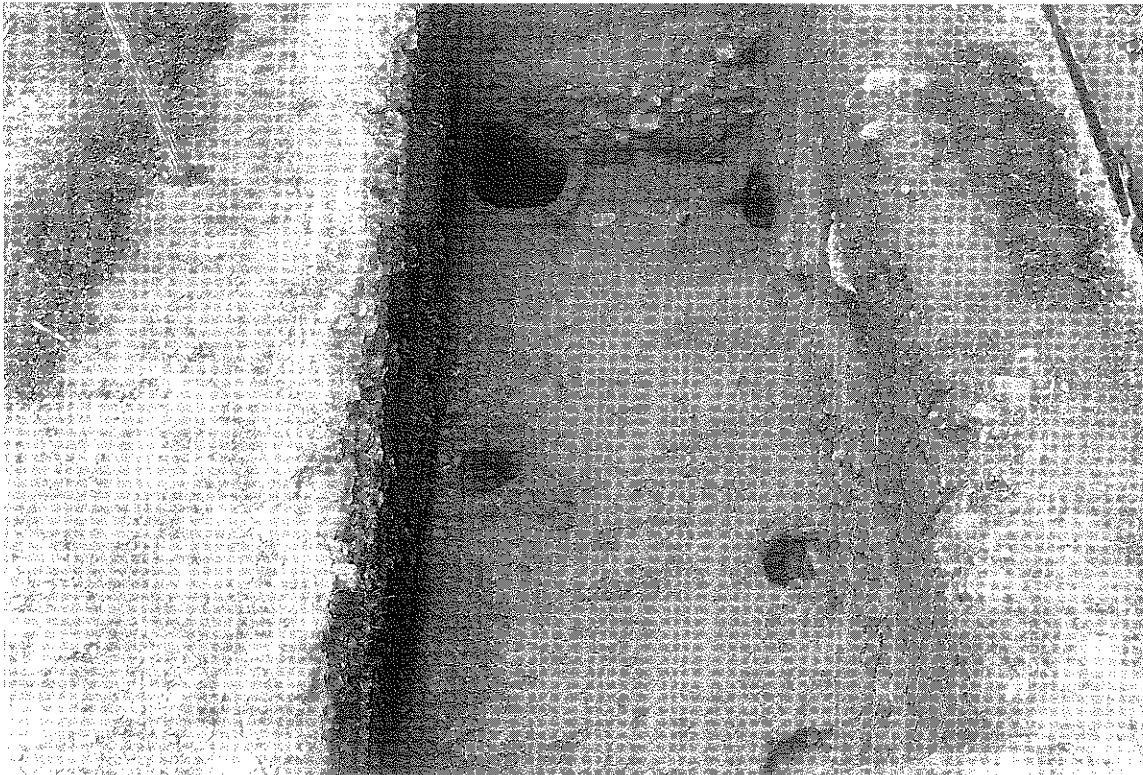


第41図 大鳳寺の範囲と調査地の位置

出土している。遺構は、中世遺物包含層の下層からピット5基を検出しているが、調査面積が小さいため遺構の性格は不明である。

出土遺物は整理箱5箱程があり、出土した層位は、ほぼ中世包含層の黄褐色粘質土層に限られる。出土遺物のほとんどは瓦で、そのうち軒瓦には軒丸瓦1点、軒平瓦1点がある。いずれも細片である。報告書の分類を援用するならば、軒丸瓦は、NM01に属し、大鳳寺創建瓦とされている川原寺式のものである。軒平瓦は重弧文軒平瓦のNH01で、川原寺式軒丸瓦とセットとなり、創建瓦とされているものである。丸瓦は、凸面ナデ調整の丸瓦Aのみが出土している。平瓦は、凸面格子叩きの平瓦Aと、凸面縄叩きの平瓦Bがある。

土器では、脚部に面取りを施す土師器の高杯・東播系の鉢などがある。



第42図 トレンチ全景

### Ⅲ ま と め

今回の調査では、小面積の調査ということもあり、明確な建物等の遺構の検出は見なかった。しかし8㎡という調査面積から見れば、遺物の出土量は極めて多いと言えよう。第3・4次調査においてもほぼ同様の状況で、この点から今回調査地周辺に北方建物を推定している。遺物が大量に出上した中世の包含層は、黄褐色の粘質土層で、自然堆積による層とは考えがたい。おそらく中世の大規模な造成によって堆積した層であろう。そうであるならば、建物は本調査地の東方に求めるべきだろう。

(参考文献)

「大鳳寺跡発掘調査報告」『宇治市文化財調査報告』第1冊 宇治市教育委員会 1987

抄 録

ふりがな	うじしまいぞうぶんかざいはくつちょうさがいほう							
書名	宇治市埋蔵文化財発掘調査概報							
副書名	白川金色院跡・平等院旧境内遺跡・大鳳寺跡							
巻次								
シリーズ名	宇治市埋蔵文化財発掘調査概報							
シリーズ番号	第41集							
編著者名	浜中邦弘・荒川史・中井淳史・松村英之							
編集機関	宇治市教育委員会							
所在地	〒611-8501 宇治市宇治琵琶33番地							
発行年月日	西暦1998年3月31日							
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	期間	面積	原因
しらかわこんじきいんあと 白川金色院跡	宇治市白川姿 婆山・宮の前 ・宮の後	26204	10	34° 52' 28"	135° 48' 55"	971111 ? 980305	350㎡	範囲確認
びょう とう いん 平 等 院 きゅうけい だい い せき 旧境内遺跡	宇治市 宇治塔の川	26204	80	34° 53' 10"	135° 48' 42"	970811 ? 970814 970909 ? 971112	300㎡	宅地開発
たい ほう じ あと 大 鳳 寺 跡	宇治市菟道 西中・藪里	26204	5	34° 53' 56"	135° 48' 47"	970707 ? 970715	8㎡	宅地開発

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
白川金色院跡	寺院	平安時代 ? 江戸時代	経塚遺構 閼伽井跡 坊跡	鏡・陶磁器 鉄製品・土器 青銅製品	
平等院 旧境内遺跡	寺院	平安時代	庭園跡	土器・瓦 勾玉	
大鳳寺跡	寺院	白鳳時代	柱穴	瓦・土器	



宇治市埋蔵文化財発掘調査概報

— 第41集 —

発行日 平成10年3月31日  
発行者 宇治市教育委員会  
〒611-8501 宇治市宇治琵琶33番地  
(0774) 22-3141 (代)  
印刷 有限会社 新進堂印刷所





